大阪府埋蔵文化財調査報告2000－5

陶邑・谷山池12号窯

２００１年3月

大阪府教育委員会

はしがき

陶邑窯跡群は、堺市南部から大阪狭山市、和泉市にかけてひろがる５世紀から10世紀まで続く我が国最大の須恵器生産遺跡です。

また、弥生時代の池上曽根遺跡、古墳時代の百舌鳥古墳群や和泉黄金塚古墳等とともに和泉地域の代表的な遺跡として挙げられる重要な遺跡でもあります。須恵器は、古墳時代から奈良・平安時代にかけて、それまでの縄文、弥生時代の土器、古墳時代以降の土師器とは異質の、大陸・半島系の技術によって成立した新しい土器です。『日本書記』に記された「河内国茅渟県陶邑」は、堺市南部の一部がかつて陶器村と呼ばれていたことや「スエ」の地名を有する場所から須恵器が出土することが多いこと等から、現在の泉北ニュータウンを含む広い地域であったと考えられています。

本府教育委員会では、柑橘母樹園跡地整備に伴い、所在する窯跡について発掘調査と遺物整理事業を実施してきました。従来乏しかった谷山池地区の須恵器の資料を報告することができ、今後の調査･研究に大きな貢献をはたすことができるものと思われます。

発掘調査に際しまして地元の皆様並びに関係各位のご協力を得ましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも本府の文化財保護行政へのご理解とご協力をお願いいたします。

平成13年３月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　小　林　　栄

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が実施した柑橘母樹園跡地整備事業に伴う、和泉市鍛冶屋町および浦田町所在陶邑窯跡群（谷山池12号窯跡）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は大阪府環境農林水産部農の振興整備室（現農政室）の依頼を受けた文化財保護課が、平成10年９月から11年３月まで調査第１係主任技師今村道雄を担当者として実施した。遺物整理は、平成11年４月から平成13年３月まで、今村及び資料係技師井西貴子、調査管理グループ技師小浜　成を担当者として実施した。

3．航空写真測量は、㈱ウエスコに委託して実施した。なお、撮影フイルムは同社において保管している。

4．本書の執筆・編集は、今村が行った。

5．発掘調査、遺物整理及び本書作成に要した経費は、全額大阪府環境農林水産部が負担した。

はしがき

陶邑窯跡群は、堺市南部から大阪狭山市、和泉市にかけてひろがる５世紀から10世紀まで続く我が国最大の須恵器生産遺跡です。

また、弥生時代の池上曽根遺跡、古墳時代の百舌鳥古墳群や和泉黄金塚古墳等とともに和泉地域の代表的な遺跡として挙げられる重要な遺跡でもあります。須恵器は、古墳時代から奈良・平安時代にかけて、それまでの縄文、弥生時代の土器、古墳時代以降の土師器とは異質の、大陸・半島系の技術によって成立した新しい土器です。『日本書記』に記された「河内国茅渟県陶邑」は、堺市南部の一部がかつて陶器村と呼ばれていたことや「スエ」の地名を有する場所から須恵器が出土することが多いこと等から、現在の泉北ニュータウンを含む広い地域であったと考えられています。

本府教育委員会では、柑橘母樹園跡地整備に伴い、所在する窯跡について発掘調査と遺物整理事業を実施してきました。従来乏しかった谷山池地区の須恵器の資料を報告することができ、今後の調査･研究に大きな貢献をはたすことができるものと思われます。

発掘調査に際しまして地元の皆様並びに関係各位のご協力を得ましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも本府の文化財保護行政へのご理解とご協力をお願いいたします。

平成13年３月

大阪府教育委員会

文化財保護課長　小　林　　栄

目　　次

第１章　調査にいたる経過……1
第２章　調査成果……7
　　遺構……7
　　遺物……15
まとめ……22
遺物観察表……23～30

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……2
第２図　谷山池12号窯周辺の地形と窯跡分布図……3
第３図　谷山池12号窯調査地平面図……5
第４図　谷山池12号窯平面図断割土層断面図……6
第５図　谷山池12号窯灰原縦断土層断面図……7
第６図　分布調査成果図（和泉丘陵遺跡分布状況調査会報告書1977）から……8
第７図　谷山池12窯周辺の地形と窯跡分布図（和泉丘陵内遺跡調査会報告書）から……9
第８図　窯体床面、窯体埋土出土遺物実測図……10
第９図　土器群１、土器群２出土遺物実測図……11
第10図　窯体南側出土遺物実測図……12
第11図　灰原１区、２区出土遺物実測図……13
第12図　灰原２区、３区、４区出土遺物実測図……14
第13図　灰原４区、包含層出土遺物実測図……15
第14図　ヘラ記号、杯内面同心円文、杯外面調整……16
第15図　杯加工品、穿孔円盤、砥石実測図……17
第16図　軒丸瓦、丸瓦実測図……18
第17図　ＴＮ56、ＴＮ58、ＴＮ61採集遺物実測図……19

図　版　目　次

図版カット写真　　窯体南側出土壷
図版１　遺構　（上）　調査区遠景
　　（下）　調査区近景
図版２　遺構　（上）　機械掘削状況
　　（下）　灰原除去後の旧地形
図版３　遺構　（上）　窯体調査状況（東から）
　　（下）　窯体調査状況（南から）
図版４　遺構　（上）　床面遺物遺存状況
　　（下）　床面遺物出土状況
図版５　遺構　（上）　窯南側土器群１出土状況
　　（下）　窯南側土器群１出土状況
図版６　遺構　（上）　窯南側土器群１出土状況(細部)
　　（下）　窯南側土器群２出土状況(細部)
図版７　遺構　（上）　窯体検出状況(北から)
　　（下）　窯体検出状況(北から)
図版８　遺構　（上）　窯体断ち割り状況
　　（下）　近世溝検出状況
図版９　遺物
図版10　遺物
図版11　遺物
図版12　遺物
図版13　遺物
図版14　遺物
図版15　遺物
図版16　遺物

第１章　調査にいたる経過

陶邑・谷山池12号窯は、陶邑窯跡群谷山池支群に含まれ、古墳時代後半の須恵器を生産した登り窯（以下ＴＮ12とも略する）で、大阪南部の和泉市鍛治屋町および浦田町（第１図）の元府立柑橘母樹園果樹センター内に位置します。かって同センターは、蜜柑や八朔等の品種改良のために各種柑橘類の交配や接ぎ木育成等を行い、泉州地域の丘陵地帯の農家に苗木を供給していました。各農家は果樹を栽培し、摘み取られた蜜柑は泉州蜜柑として市場に出荷されていました。しかしここ10数年来、産地の多様化や消費者の嗜好の変化により競争が激化し、泉州蜜柑の需要は減少し、それに、伴い果樹センターの機能の意義は薄れ、羽曳野市に設立された農林センターに統合されることになり今から10数年前の昭和59年３月廃止されました。

廃止後、果樹センター跡地の管理は民間人に委ねられてきましたが、泉北ニュータウンの充実、近年は当地の北西１㎞に和泉中央駅が設置され、通勤手段や付近の交通事情が大きく変化し、都市整備公団によって手がけられてきた宅地開発は、付近の地価に著しい影響を与え土地の高度利用を促す結果となりました。ニュウータウンの拡張は旧市街地と新市街地に格差を生み、特に道路開発は生活、産業基盤に大きな影響を与えております。

国道480号線から西に500ｍほど奥にある果樹センターに至るには、旧村落内を通行しなければならず大型車両の通行が不可能となっています。このため跡地の利用は、交通問題で大きな制限を受けるため、ニュータウンとを隔てている丘陵を抜けて和泉中央駅側との通行を計り、土地の利用効果を高めようとするためです。

谷山池12号窯等の立地する場所は、かって和泉丘陵と呼ばれ、今でも所々に丘陵の面影を残している。和泉中央駅を中心にして「いぶき野」、「のぞみ野」、「はつが野」と呼ばれている箇所の開発に際して、事前に予定地内の埋蔵文化財の分布調査を実施した際に発見された窯跡である。調査は、昭和52年２月２日から３月31日まで行われその成果の一部は「泉丘陵遺跡分布調査報告書」（1977年３月）として報告されている。この調査で確認できた窯跡や散布地は同書に次のように報告されている。

大池周辺	窯跡	33箇所のうち確認した窯跡９箇所
長池周辺	窯跡	19箇所のうち確認した窯跡10箇所
谷山池周辺	窯跡	13箇所のうち確認した窯跡８箇所
梨本池周辺	窯跡	21箇所のうち確認した窯跡18箇所

柑橘母樹園センター及び付近は大池周辺地域に含まれ、Ｃ８から20までが確認され、谷山池12号窯はＣ12地点（第２図）に該当している。同センター敷地内にはＣ13地点も含まれているようであるが詳細は不明である。その後、和泉丘陵内遺跡調査会によって和泉ニュータウン建設に伴う事前発掘調査が昭和56年度から平成元年度まで行なわれ、散布地と窯跡の有無について試掘調査が行われ、窯跡については調査が実施され、「陶邑窯跡群－谷山池地区の調査－」（1992年）が報告されている。この中で谷山池12号窯に近いＣ６地点とＣ９地点からは遺物が発見されず、そ

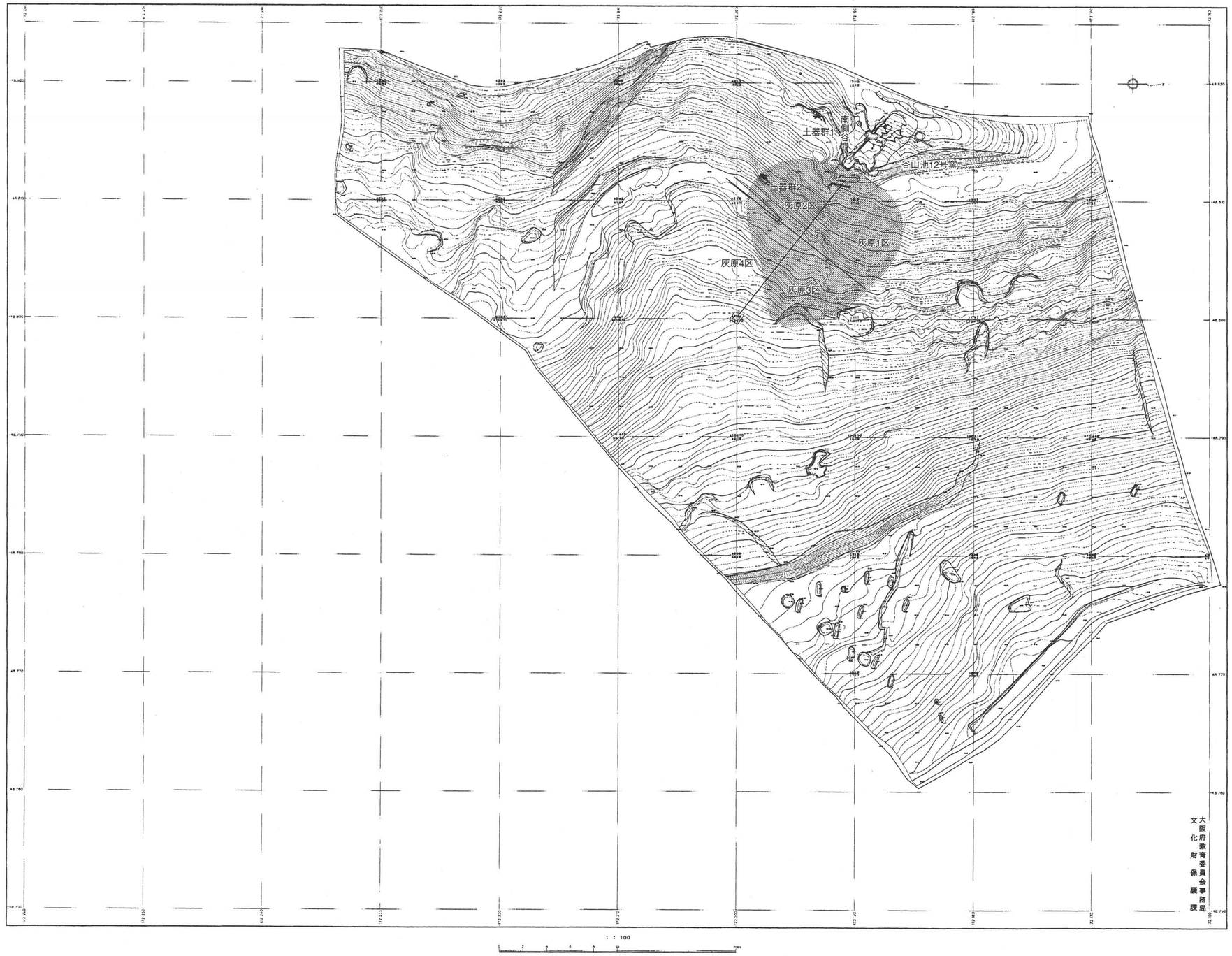
第１図　調査地と谷山池地区市街地図

第２図　谷山池12号窯周辺の地形と窯跡分布図

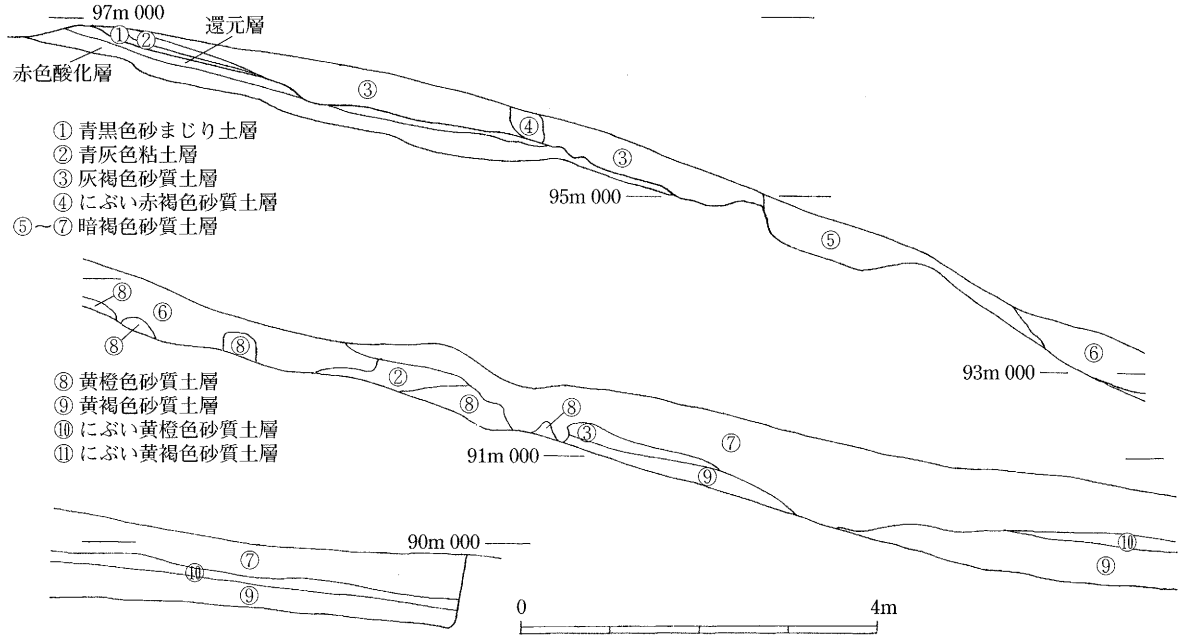
れぞれ窯跡（第７図）から除外された。

大阪府農林部と文化財保護課は、柑橘母樹園跡地整備（第２図）に当たり既存の窯跡以外にも窯跡が存在する可能性があることから、試掘調査を実施し予定地内の窯跡を確認することとした。

試掘調査は農林部の依頼を受け文化財保護課が実施した。試掘対象範囲は敷地の北半分である。調査期間は、平成８年７月１日から３日で、14箇所の試掘トレンチのうち３箇所から窯壁や須恵器が出土した。この結果に基づき両者は協議を行い、事前発掘調査を平成10年度事業に計画した。現地調査は、平成10年９月に開始し、12月に終了した。



第３図　谷山池12号窯調査地平面図



第５図　谷山池12号窯灰原縦断土層断面図

第２章　調査成果

遺構（第３図、第４図、第５図）

調査概要

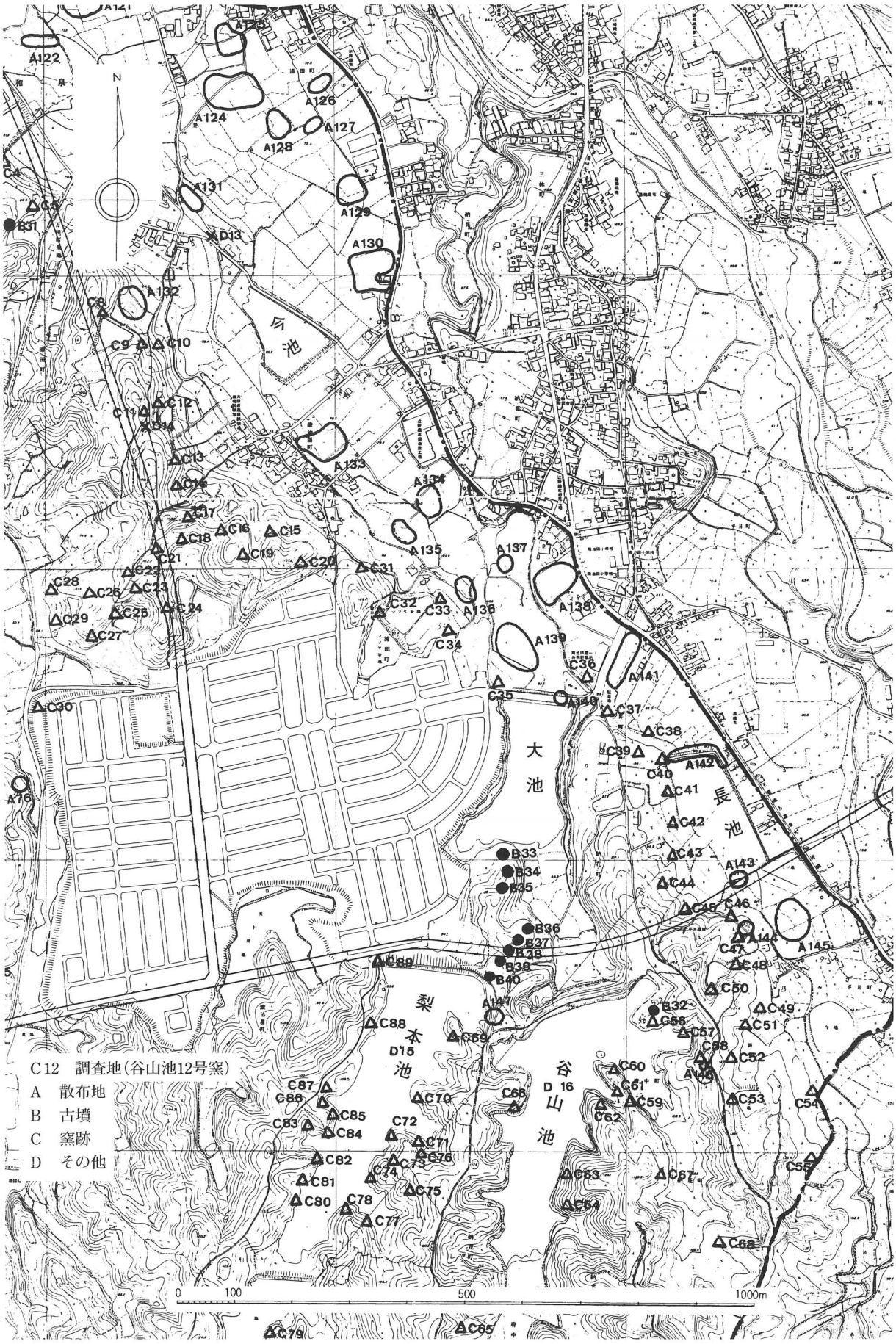
12号窯は、丘陵の東側斜面、比高20ｍ余の斜面上部に立地する。現地は果樹園が昭和59年に廃止されてから手入れが行き届かないため孟宗竹と下草が繁茂し、歩くのに困難な状況であった。調査は柑橘母樹園の北半側に、窯跡と灰原部分を含むように東西約50ｍ余、南北約40ｍ余の範囲で面積2.634平方ｍ（第３図）を設定し、草刈りと竹の伐採から始め、表土の除去は重機械を利用した。果樹園であったことから客土や土の天地返しが全域で行われており、地山と整地土、客土の区分が困難であったが、窯体は稜線近くに築かれていたため表土除去後すぐ表れ、確認することができた。

灰原の土は大きく動かされ、当初の土層を観察できる箇所は認められなかった。

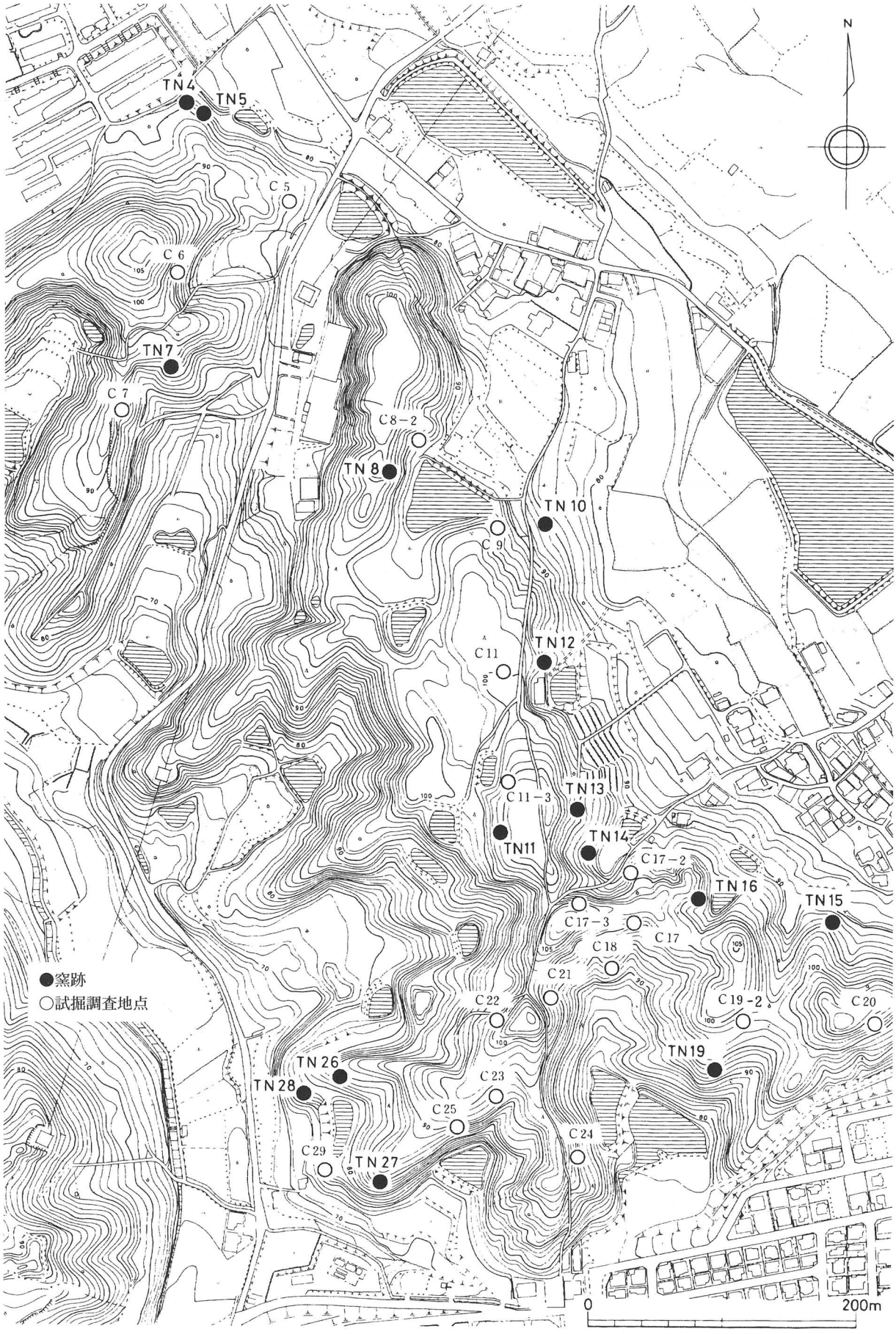
調査を進めた結果ＴＮ12号窯は、焼成部（第４図）を約６ｍ残すのみで、前底部、焚き口、焼成部、左右側壁、天井部、煙道部等は削平され、果樹園の客土として利用されたと考えられる。床面にも大きな穴が目立っている。

窯以外では南側の少し低い所と灰原２区から土器群を２箇所（第３図）検出している。

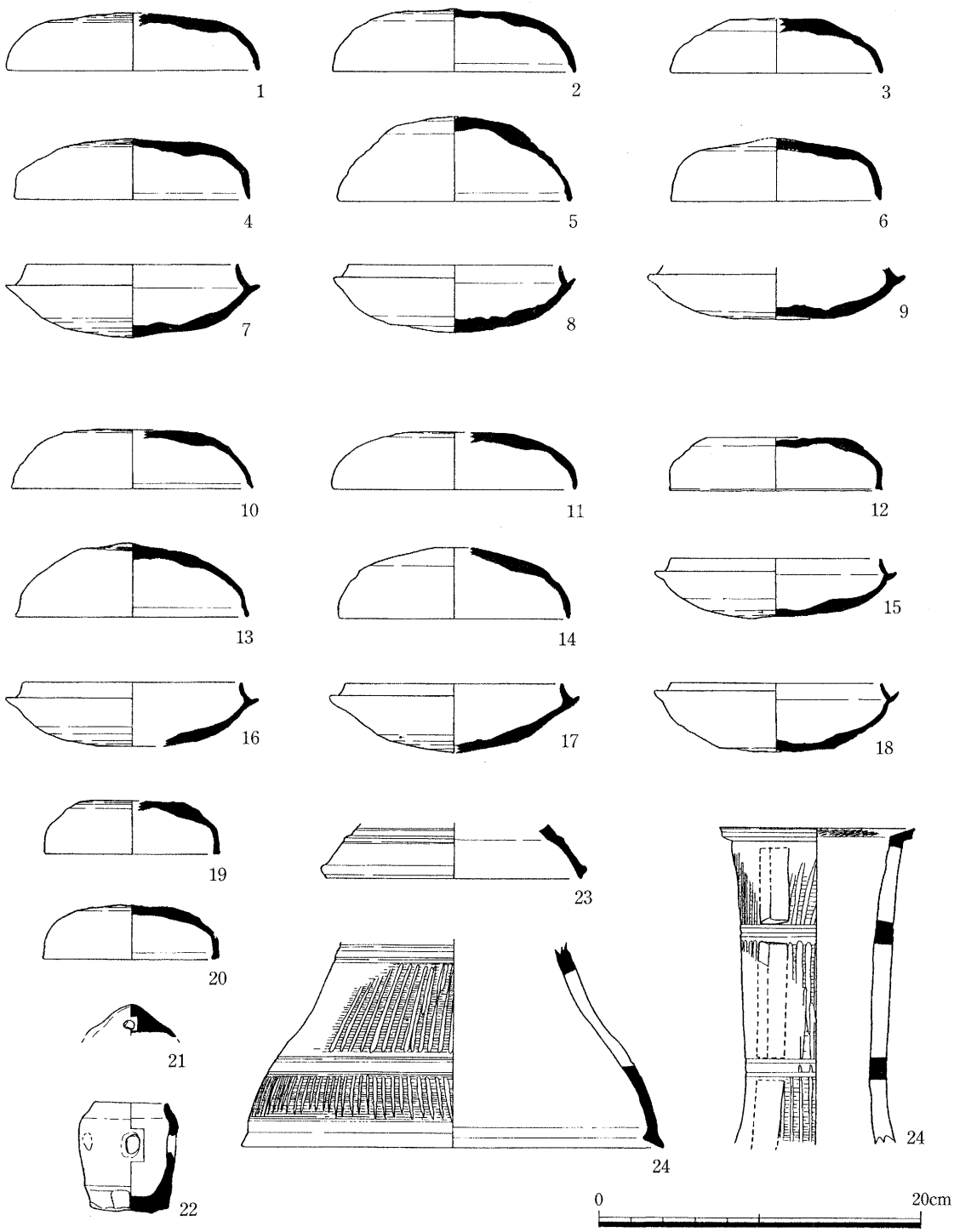
土層　窯の内部に堆積した、須恵器や窯壁を含む青黒色砂質土層、灰褐色砂質土、にぶい赤褐色砂質土を除去すると還元層（断面Ａ、土層１・２の灰色粘質土層や砂利断面Ｂ、土層２、灰色砂質土層、断面Ｃ、土層６、灰色砂質土層）を認めることができる。還元層の周囲には赤褐色の酸化層（地山、赤焼け）が認められる。還元層の範囲は長さ約5.6ｍ、幅約２ｍ、壁の立ち上がり約30㎝、床面の傾斜は約10～12度である。窯を築いた地山の土層は砂の多い砂質土である。赤色酸化層は砂質土に見られる。環元層の枚数から、操業回数は３回以上と考えられる。



第６図　分布調査成果図（和泉丘陵遺跡分布状況調査会報告書 1977年から）



第７図　谷山池12号窯周辺の地形と既応の調査地
（和泉丘陵内遺跡調査会『陶邑古窯址群』1992年から）



第８図　窯体床面(1～9)、窯体埋土(10～24)出土遺物実測図

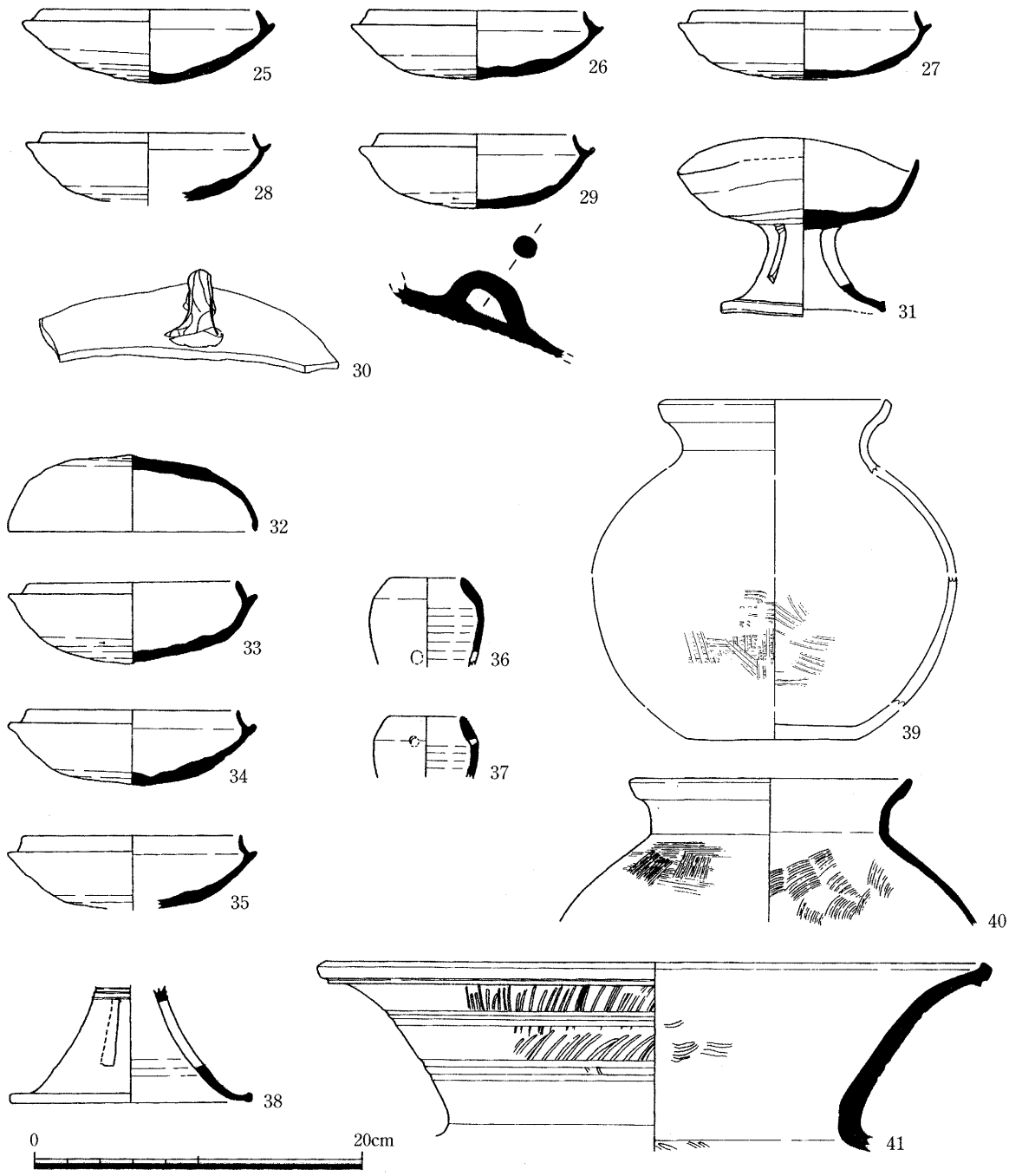
床・壁（第４図）

床の構築は、地山の砂質土の上に粘土を混ぜた土を張っている。操業当初には床に土層２の灰色砂質土、３の明黄褐色砂質土を張り、次の操業時には土層６の灰色砂質土、５の灰黄褐色砂質土を床材に使用している。

撹乱の被害をあまり受けていない断面Ｃでは、床から壁にかけて土を張った状態が観察できる。

部分的な補修の痕跡は第３次操業の際の断面Ａの土層１に観察できる。壁材の土はスサを含んでいる。

なお床面と遺物の間には細礫を含む褐灰色砂を厚さ５㎝前後挟んでいる。この砂は遺物の下に



第９図　土器群１(25～31)、土器群２(32～41)出土遺物実測図

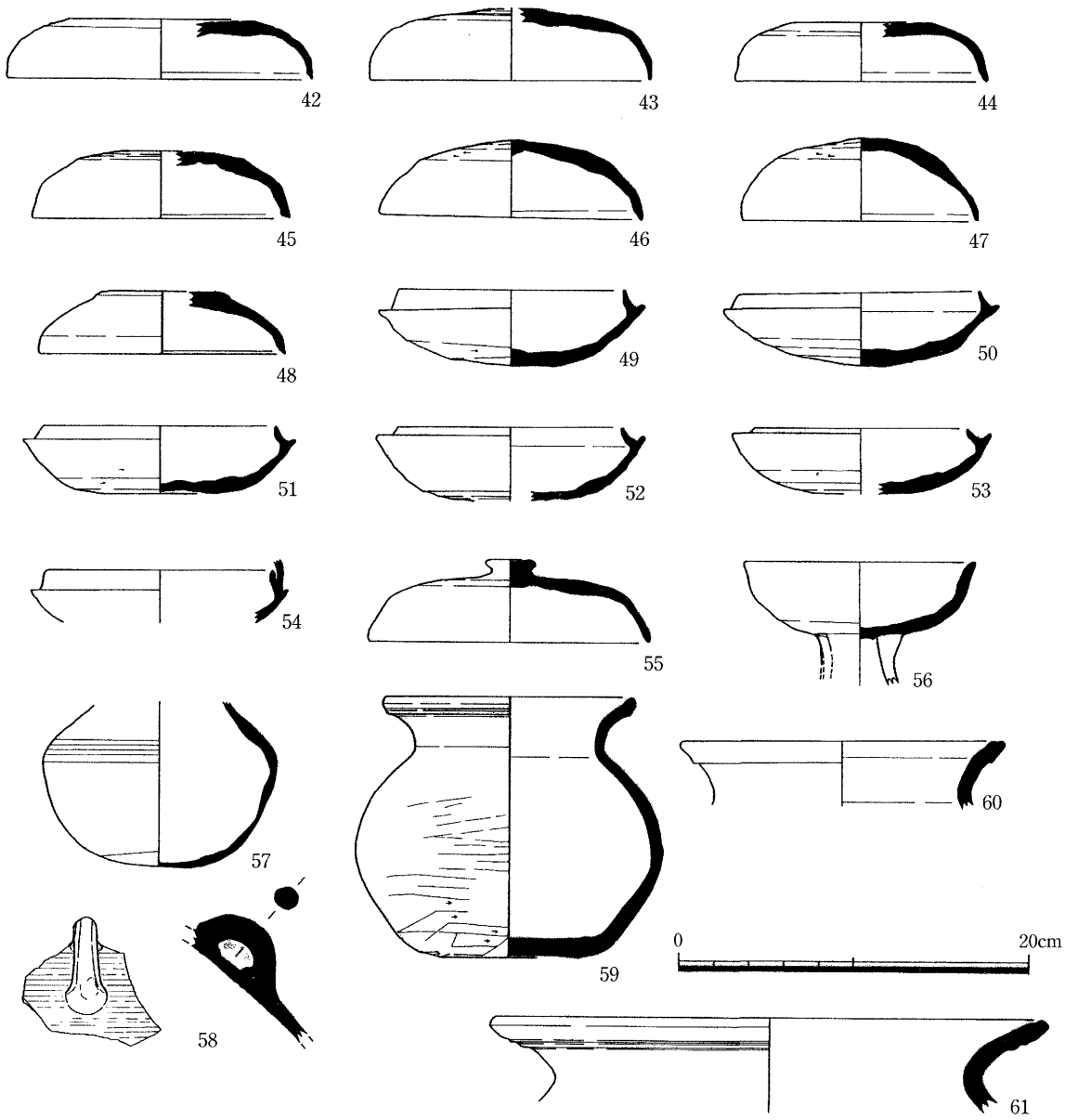
置いたか床面の上に撒き敷かれたものとも考えられる。

出土遺物

窯体内の堆積土を除去後に第８図の１～９の遺物が出土している。床面と遺物の間には褐灰色砂を挟んでいる。

窯体埋土中の出土遺物は10～24の坏、蓋壺、器台等の他甕腹の破片である。

土器群１　窯の南６ｍの谷状地形の中にある。窯の推定焚き口とほぼ同じ高さの標高96ｍ付近にある。一段低い箇所に須恵器坏身25，29等の６点と甕腹片の計７点が出土した。土器の出土状況は表裏など並べ方に規則性は認められない。他に遺物は出土していない。

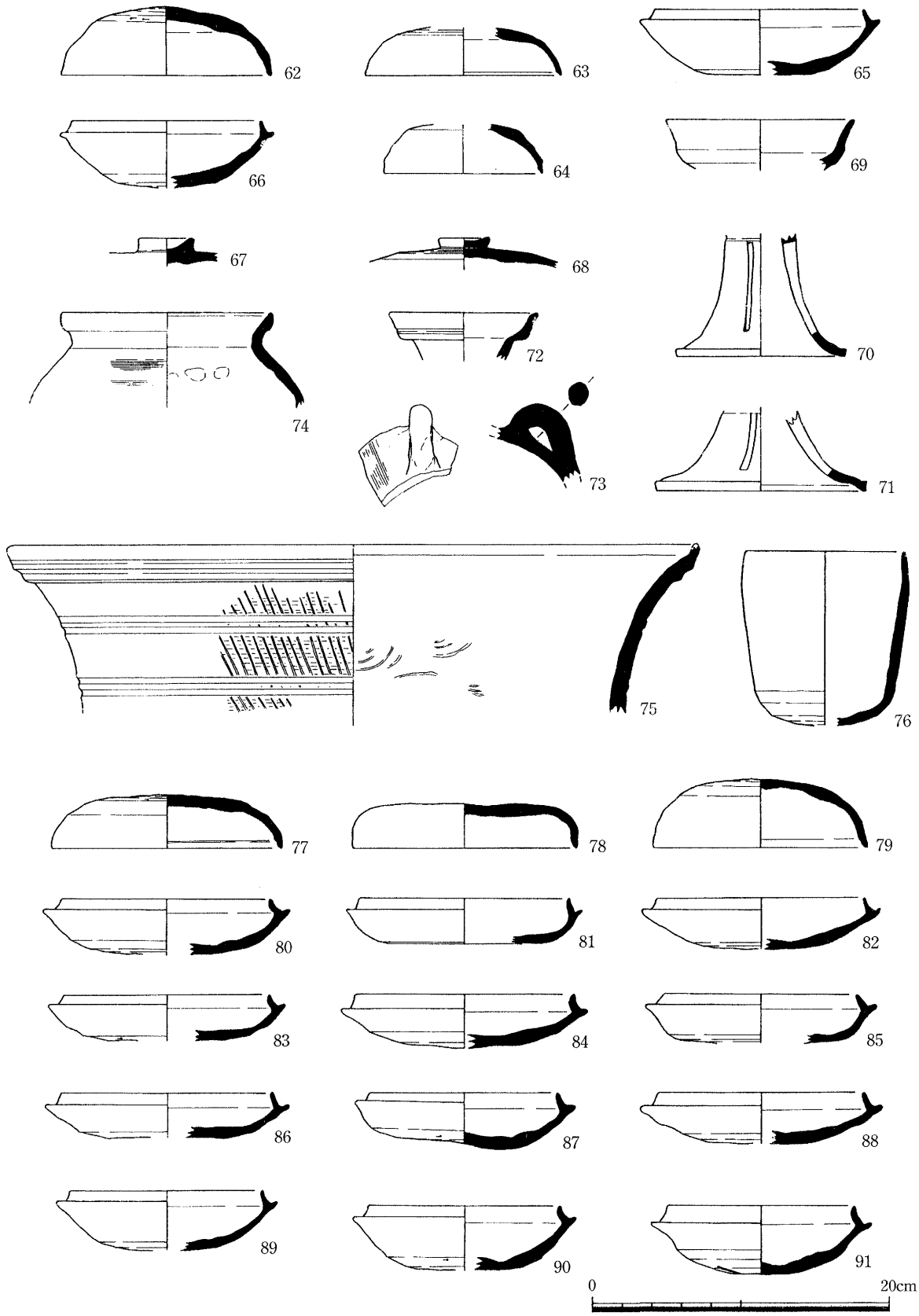


第10図　窯体南側(42～61)出土遺物実測図

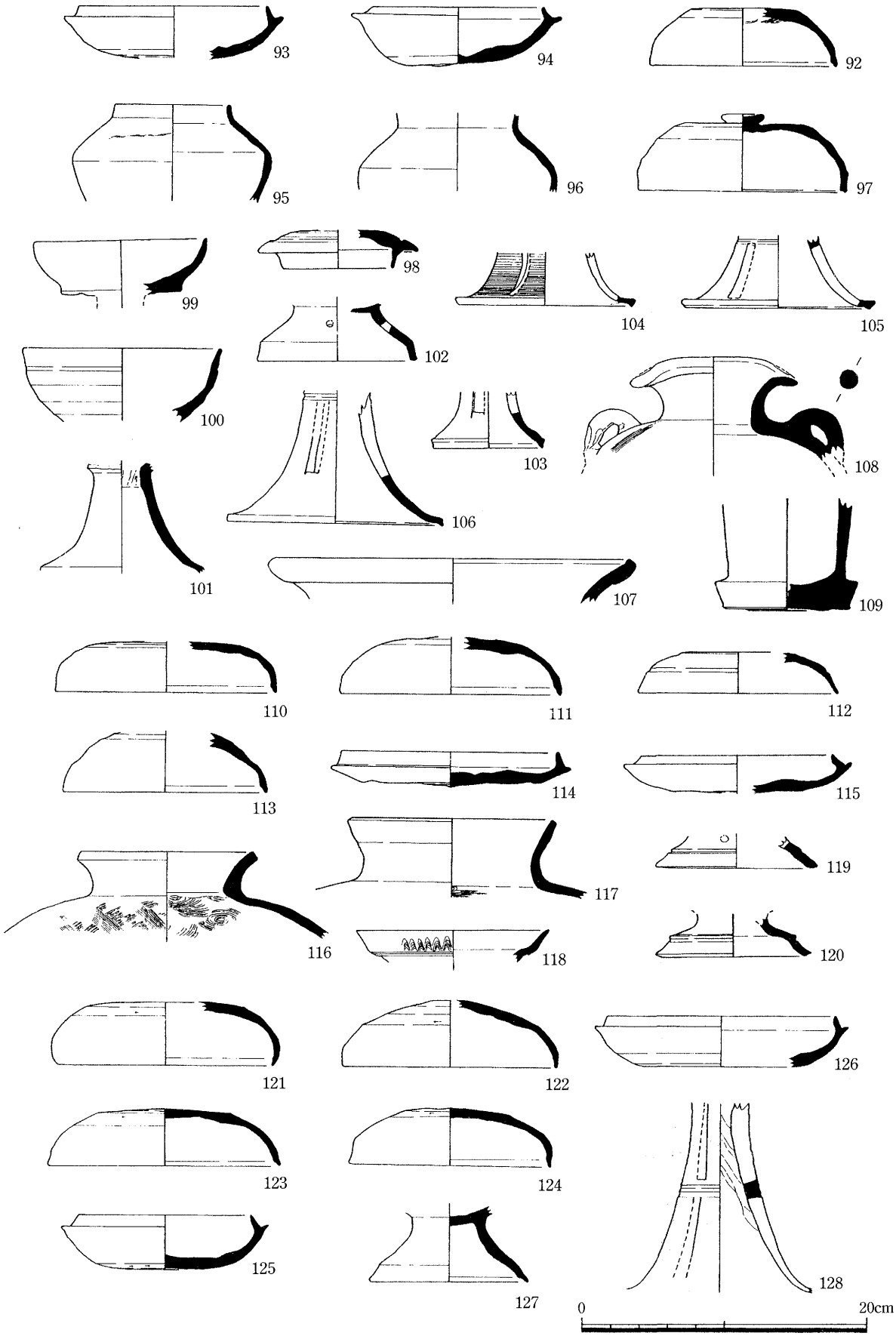
土器群２　灰原２の黒褐色土を除去後砂質土の地山上面から検出した。12号窯から６ｍ、土器群１の南東７ｍに位置する。緩い斜面にそって下から上に土器が重なり合い、中には坏身34、蛸壺片36，37、灰白色で薄手の39，40の平底と考えられる甕などが出土している。

谷状地形　12号窯の南西側に小さな谷状の地形が認められた。この谷は窯の南２Ｍまで近接し、馬蹄形状に広がる。埋土はにぶい黄色と灰黄色砂質土である。この谷状地形の上部に土器群１がある。この谷状地形からは多くの坏の他に59平底の軟質の甕が出土している。

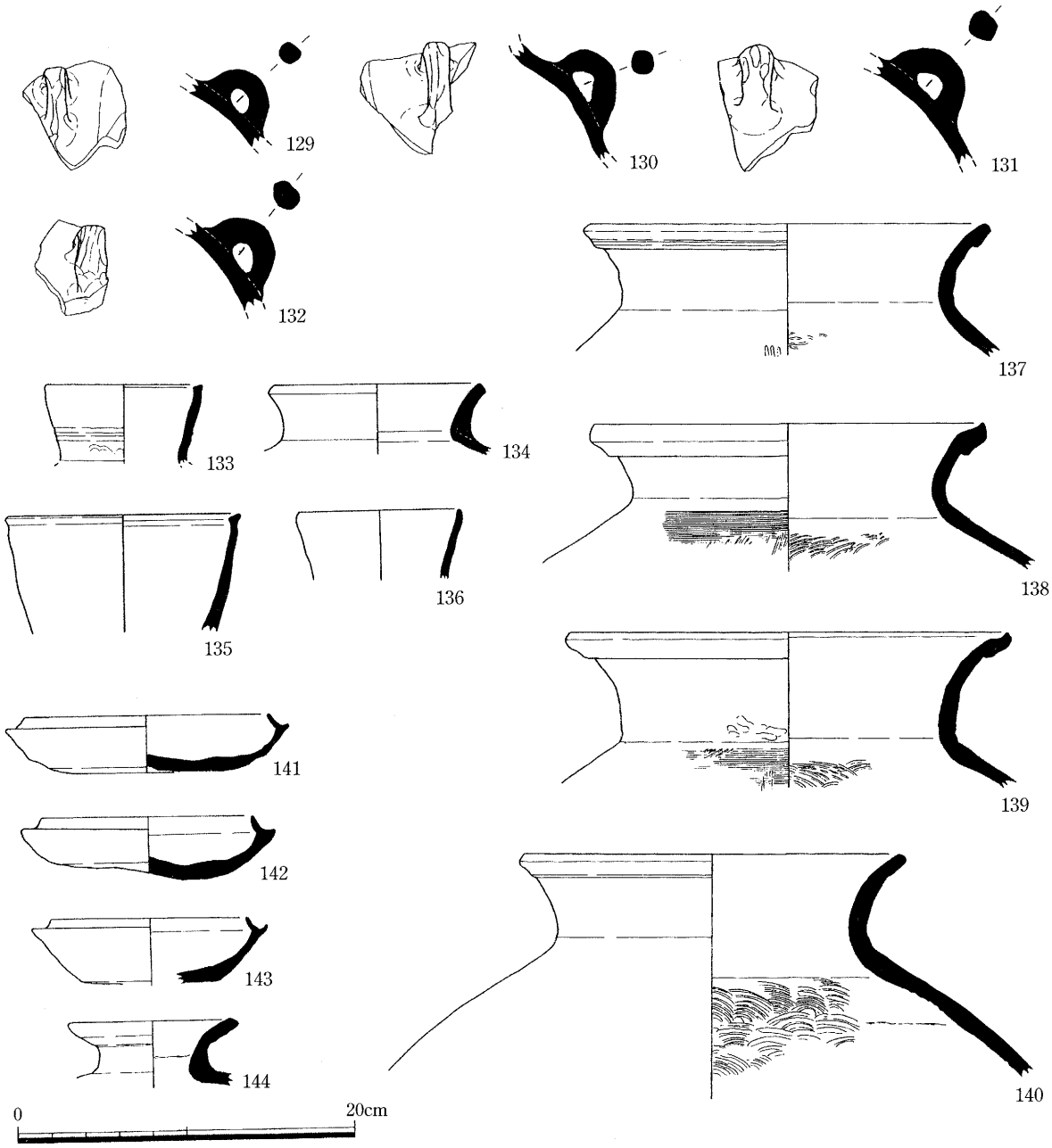
灰　　原　灰原は窯の斜面下方に20ｍ足らず、左右に15ｍほど広がり、一部は窯の南側にも広がっている。灰原の土は暗褐色と褐色砂質土である。遺物は須恵器杯、高杯、壺、甕、瓦、砥石等である。



第11図　灰原１区(62～76)、２区(77～91)出土遺物実測図



第12図　灰原２区(92～109)、３区(110～120)、４区(121～128)出土遺物実測図



第13図　灰原４区(129～140)、乞含層(141～144)出土遺物実測図

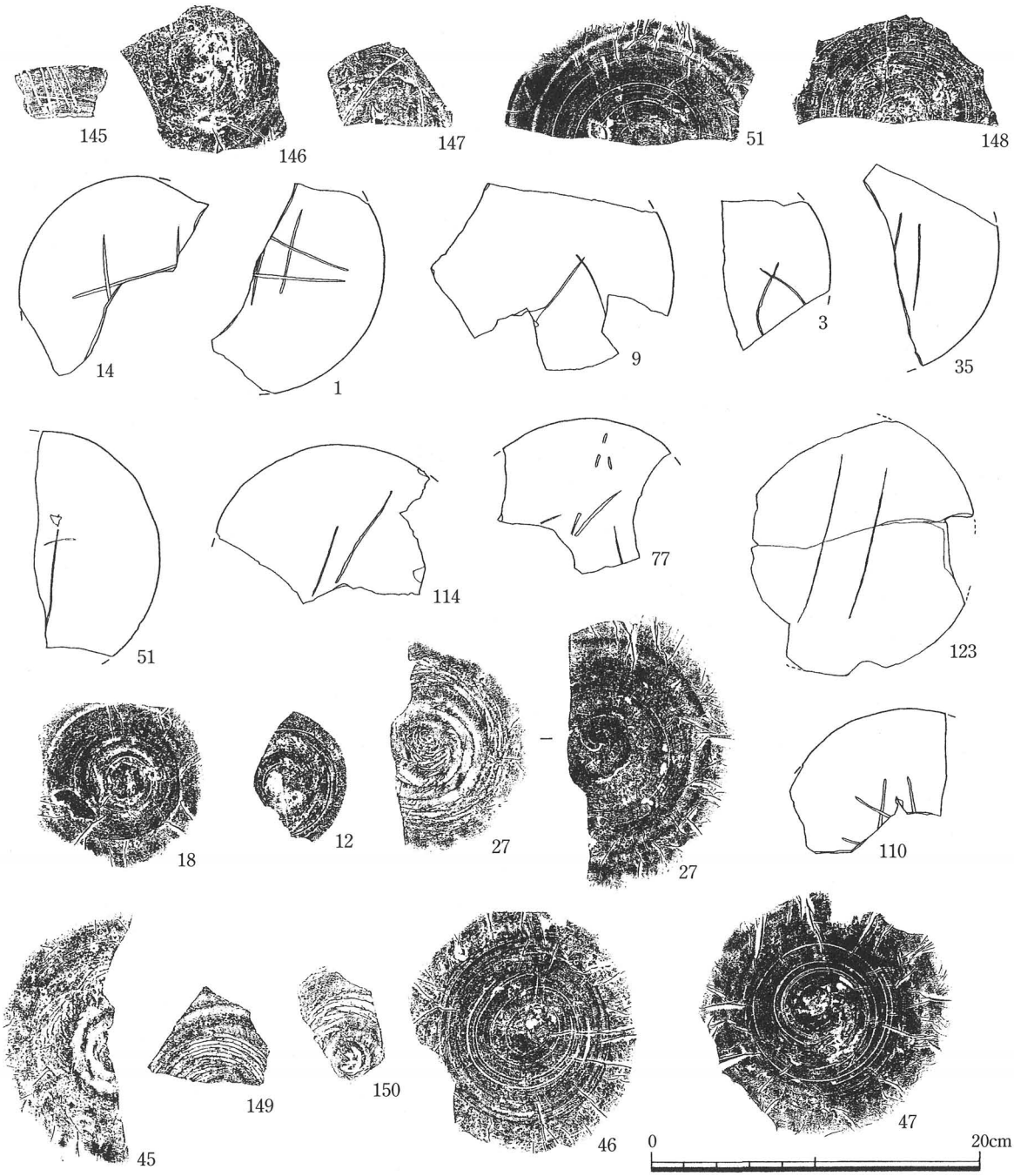
杯 蓋 123は外面に赤色顔料を塗布している。この他に赤色顔料を塗布した直口壺の破片１点がある。

遺物（第８図～16図）

今回の調査ではコンテナ40箱の遺物が出土した。大半は 須恵器で10.395点を数えた。

各器種の内訳は甕	4.492点	43.2%
杯	5.395点	51.9%
その他	508点	4.9%

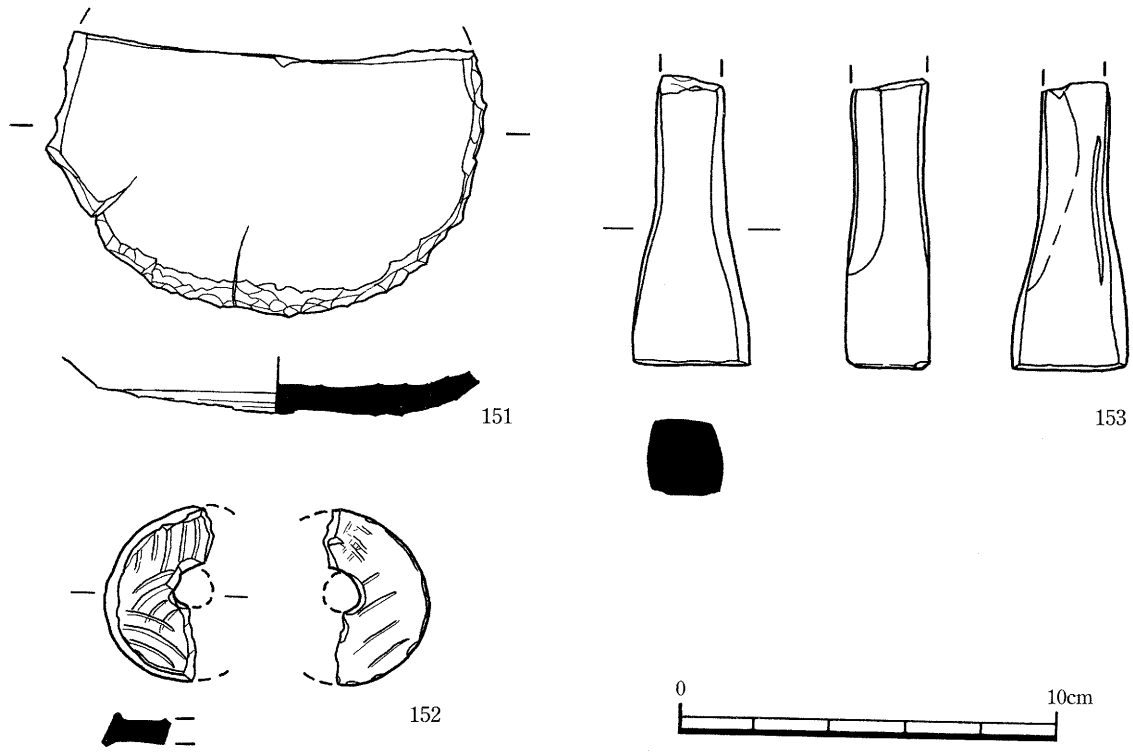
となり、杯が圧倒的に多い。



第14図　ヘラ記号、杯内面同心円文、杯外面調整

その他の器種の内訳は

短頸壺・壺	139点	27%
高杯	136点	27%
提瓶	167点	33%
蛸壺	12点	2 %
横瓶	15点	3 %
器台	7 点	1 %
鉢	8 点	2 %



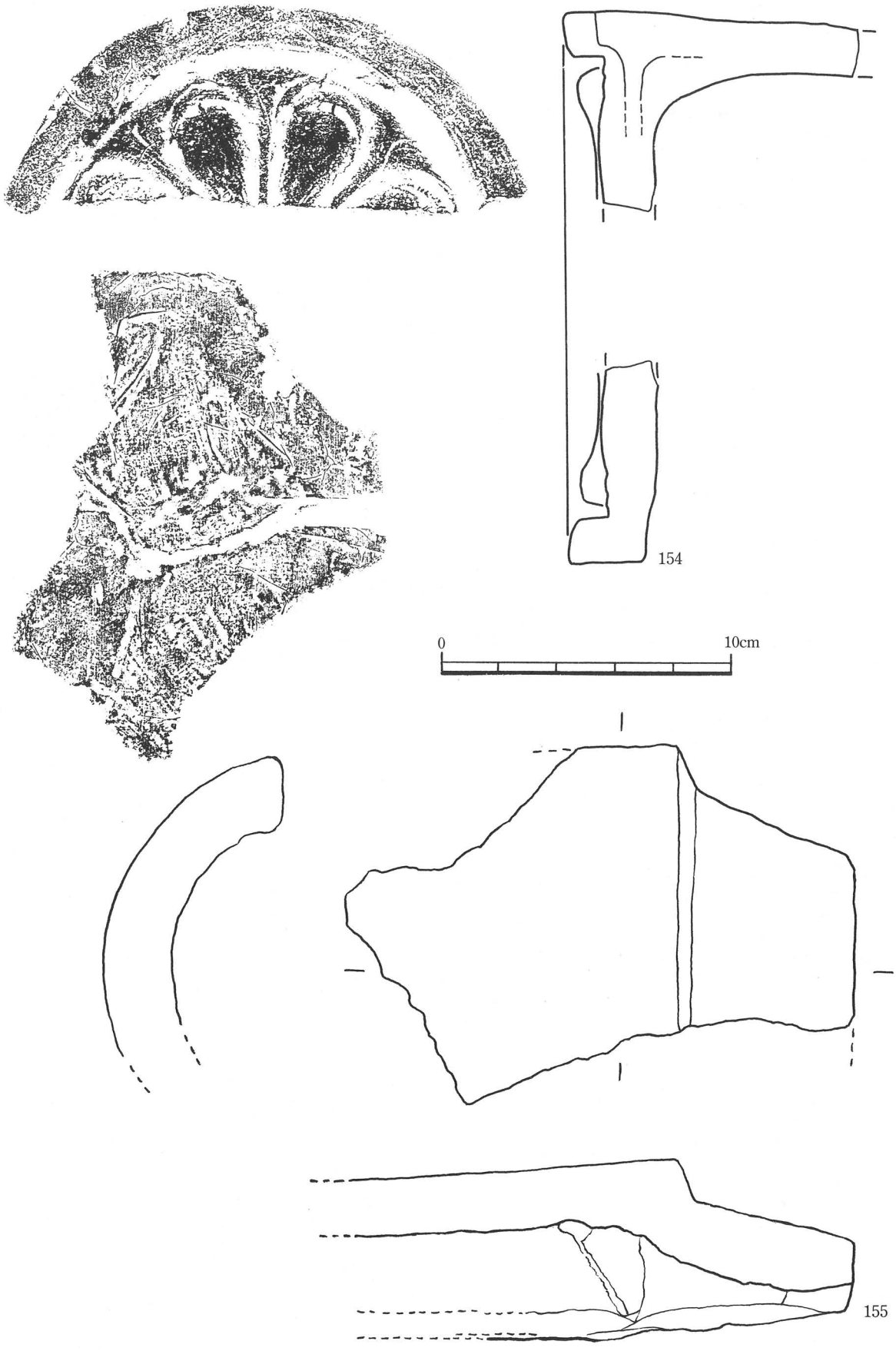
第15図　杯加工品(1)、穿孔円盤(2)、砥石(3)実測図

はそう	13点	3％
すり鉢	5点	1％
その他	6点	1％

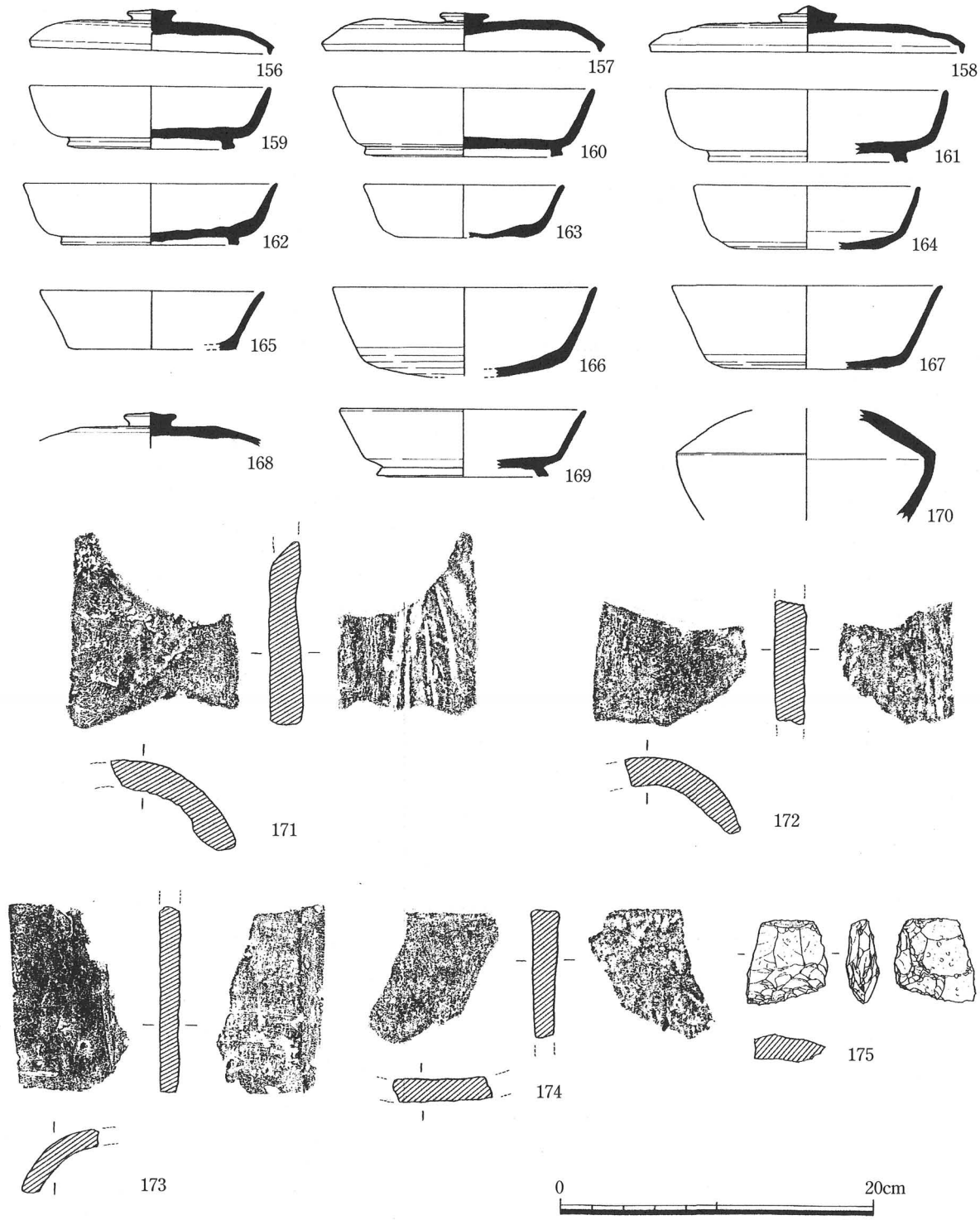
となる。

杯　杯は残存率の多い杯を撰び集計したがほぼ同数出土している。本書に掲載した杯の内、集計に用いた点数は杯蓋32点、杯身43点である。

杯蓋は口径12.5～13cm（4点)、13～13.5cm（2点)、13.5～14cm（3点)、14～14.5cm（7点)、14.5～15cm（8点)、15～15.5cm（5点)、15.5cm以上（3点）を数えることができる。陶邑のこの時期の須恵器の編年には中村編年Ⅱ形式3～4段階において、蓋はA～Dに区分されている。田辺編年では、TK43型式に該当する。一方、谷山池地区の調査報告書ではTN8、16号窯の杯としてC1が上げられ，TN7号窯ではC2タイプの杯が主体をなしていることが報告されている。12号窯の蓋は14～15cmのものが多いことからTN16号窯のC1タイプの杯と7号窯のC2タイプの杯と比較できそうである。しかし12号窯においては口径13cm前後の杯蓋が見受けられ、杯の天井部の形状、ヘラケズリ、口縁端部の形状等を観察すれば割合平らな天井部が目立つ。TN16号窯の杯と比較すると規格面ではやや縮小している。杯天井部や底部の調整が不十分で、中央に小さくヘラ切り痕（12,17,18,47,77,146等）を残したものや（18）のように中央に成形時の粘土をケズリ残したものが杯163点中35点出現している。またヘラケズリを施しても中央が盛り上



第16図　軒丸瓦(1)、丸瓦(2)実測図



第17図　TN56(156～167)、TN58(168～170)、TN61(171～175)採集遺物実測図

がり（2，6，13，32，43等）不安定な形ものが163点中21点になる。坏内面に施されていた静止ナデはこの窯では極めて少なく数点（128）である。杯蓋外面に沈線や段、凹線を用いるものは1点（112）のみで、他の杯には観察できない。この須恵器は高杯の可能性もある。蓋杯の特徴をＴＮ16号、７号窯、一部はＴＮ８号窯のものと比較しつつ述べたが端部内面の形状は凹線状のものが多い。特に口縁端部の形状と杯口径との関係は今後の課題でもある。わづかではあるが、口

径14～15cmの杯蓋は口縁端部内面を凹線状に施したものが７点と多く、稜線を持つもの４点、段になるもの４点、丸い端部のもの３点、内傾する面を持つもの２点である。

杯身は蓋と同様にやや小ぶりな口径11.5～12cm、12～12.5cm前後のもの（７点、２点）、口径12.5～13.0cm前後のもの15点、13.0～13.5、13.5～14cmのものまで（９点、７点）、14～14.5、14.5～15.0、15.0～15.5cmのもの（３点、１点、１点）である。杯身にも蓋と同様に小ぶりな口径の１郡のものがある。この中で杯身第13図143は、底部外面が未調整である。

杯は、この他に内面に同心円文を残すものが少しある。計測した杯75点を含め約360点を観察した結果、同心円文を残すものは28点である。また、同心円文の残る位置は、第14図の127，145～150の様に杯（蓋、身）の内面の一部である。

ヘラ記号は、杯蓋、身（第14図、図版14）ともにみられる。観察した点数は杯及び破片全てである。記号の種類は７種類、34点である。

短頸壺・壺　この中で多いのは短頸壺である。壺は、頸部には凹線文と波状文を施文し、器台についで多く装飾している。体部の装飾は観察できない。薄い器壁の直口壺も１点あり、(133)と２個体確認できる。(133) の頸部には２本の凹線文とかすかに波状紋が残る。脚台や裾部がかなり出土している。装飾は (23) のように段と稜線を用いるものが多く、波状文等の装飾は極めて少ない。小さな透かしがつくものもある。

高杯　有蓋、無蓋と長脚、短脚に無蓋高杯の蓋がある。しかし、(31) を除いて破片である。波状文や稜線は窺えない。長脚の高杯は２段で、透かしは３方向、方形である。杯部は口縁下に一条の沈線 (100) を入れるのが多い。短脚の高杯は、方形と円形透かしのものと、ないもの等がある。(102,119) の脚の形状の高杯は３方向に円形の透かしを施したものが多い。(103) の脚の形状のものは方形透かしが多い。(127) の脚のタイプのものには透かしがない。点数が少ないため脚の形状と透かしの関係には注意を要する。いずれも杯部は欠けている。脚と杯部の接合面は刻みをほどこしていない。

提瓶　口縁は直口のもの、やや丸く肥厚するもの (108)、やや角張って肥厚するもの (144) がある。体部の肩には環状の把手が付く (58,73,129～132)。体部外面は同心円状にカキ目を施す。

蛸壺　釣り鐘型と鉢型の２種がある。(36) は大阪湾沿岸に少ないタイプである。

横瓶　角張った口縁 (116,134) のものが３点、かすかに肥厚する口縁 (117) の他に、丸い口縁が水平に外へ小さくのびるものが２点に体部破片を含めて計15点ある。体部の器壁は薄く、内面は黒色である。

器台　脚から裾部にかけて破片 (24) が７点ある。１個体分であろう。脚部はカキ目の上にヘラで縦の刻みを浅く入れ，２本１組の凹線で脚部～裾部の段を区画する。透かしは脚部の各段に方形のものを上下に３段入れる。裾部の透かしは方形であるが、配置は確認できない。脚部は杯部の接合のため上端を斜め上に曲げ接合面としている。脚部と杯部の接合面の刻み目は省かれて

いる。接合面の刻みの省略は全ての器種で進んでいる。杯底部外面はタタキとハケ目が圧着された痕跡を残す。ＴＮ12号窯の出土遺物の中で最も装飾に富む遺物である。

鉢　(76) は、内外面を横ナデし、底部外面は静止ケズリの後ナデ調整する丸底の鉢である。(135) は、肥厚し内傾する口縁の鉢である。

はそう　(118) は外上方にのびる口縁端部の外面に波状文を浅く施文している。体部の破片には凹線や波状文の装飾は見られない。

その他　(151) の杯の加工品や (152) の穿孔のある円板などがある。(39,40) の灰白色の色調の甕は両者とも外面に平行タタキの上に浅いヨコハケが残る。(59,60) は橙色系の色調の甕である。前者の体部外面下半にはヘラケズリ、上半部と底部はナデが残る。後者の甕も平底の可能性がある。４点とも精良な胎土で、当窯で焼成された遺物と考えるには困難な点もある。

また、他に、須恵器杯の周縁部を打ち欠き、窯内の焼台としたもの（第15図151）や焼成前に穿孔した円盤 (152)、５面使用の硬質砂岩製の小型砥石 (153) なども出土した。灰原からは、瓦も３点出土した。いずれも破片であったが、単弁八葉蓮華文の軒丸瓦（第16図154)、玉縁式の丸瓦 (155)、平瓦は、いずれも奈良前期のもので、僅か３点とはいえ、近くに窯の存在を推定させた。中でも、軒丸瓦は、ＴＮ12号窯の北４㎞にある禅寂寺の「端丸瓦第一形式」と同氾である（大阪府教育委員会『禅寂寺（坂本寺）跡調査概要』1966年)。

また、調査中、谷山池の渇水期に分布調査したところ、谷山池56号窯、58号窯、61号窯からそれぞれ、奈良前期の須恵器・瓦を採集することができたので、資料紹介しておく（第17図)。谷山池61号窯は、足の踏み場もない程の大量の丸瓦・平瓦が池底に現れていた。縄文時代のサヌカイト製削器も採集された。以前には、梨本池のＣ84地点から平瓦片が採集されている。

ま と め

(遺構)

・　古墳時代後期の須恵器窯跡を１基検出した。残存していたのは焼成部のみで、焼成回数は３回を数えることができた。

・　灰原も残存していて、コンテナに40箱の須恵器が出土した。

・　窯に近接した２箇所から土器群が検出され、完形品を含む多くの須恵器が出土した。

・　窯南側の谷状地形からも多くの須恵器が出土し、土器群と共に、窯出し後の須恵器選別場であった可能性が考えられた。

・　窯南側15ｍの地点から近世の小溝が検出され、内部から巴文軒丸瓦や多量の小石が出土した。水抜き用の暗渠であった可能性が考えられた。

(遺物)

・　出土須恵器は、古墳時代後期のものばかりで、時期差は認められなかった。

・　出土須恵器の器種は、杯身、杯蓋、壷、甕、高杯、器台、提瓶、横瓶、はそう、鉢、すり鉢、蛸壺などであった。

・　出土須恵器の43.2%は甕の破片で、51.9%が杯、4.9%が高杯、壷、提瓶などであった。

・　灰原出土の奈良時代前期の瓦の出土は、近隣に瓦を生産していた窯の存在を推定させた。

・　灰原出土の単弁八葉蓮華文軒丸瓦は、和泉市阪本町所在の禅寂寺（坂本寺）出土のものと同笵であり、谷山池地区で禅寂寺の瓦が生産されていたことを推定させた。

あとがき

資料の調査にあたり、四天王寺国際仏教大学名誉教授 藤沢一夫氏、和泉市教育委員会 白石耕治氏、大阪狭山市教育委員会 市川隆秀之氏、大野城市教育委員会 舟山良一氏にはご教示や便宜をはかっていただいた。記して感謝いたします。

参考文献

藤沢一夫　「摂河泉出土古瓦」様式分類の一試企・『佛教考古学論業』所収　1931

中村　浩　「陶邑」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ　大阪府教育委員会　1976、1977、1978

「和泉陶邑窯　出土須恵器の型式編年」　2001

田辺昭三　「陶邑古窯址群」　平安学園考古学クラブ 1966

和泉丘陵内遺跡調査会　「陶邑古窯址群」　1992

遺物観察表

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量（ ）は復元値（単位cm） 口径（上段） 受部径（下段）	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 （%）	備考	出土地区	実測番号
1	8・14 14	杯蓋	15.4	3.5			（内）青灰 （外）灰	45	外　天井部にヘラ記号あり。	窯体内	88
2	8	杯蓋	(15.0)	3.9			（内）灰 （外）黒	23		窯体内	94
3	8・14 14	杯蓋	(13.0)	3.4			（内）灰 （外）灰	30	外　天井部にヘラ記号あり。	窯体内	93
4	8 9	杯蓋	14.4	3.7			（内）青灰 （外）青灰	55	内　自然釉付着。	窯体内	89
5	8 9・15	杯蓋	14.2	5.2			（内）灰 （外）灰	45	内　器壁の荒れ一部にあり。 外　天井部円板状に（径8cm）接合痕あり。成形時の粘土紐巻き上げの凹凸がリング状に残る。	窯体内	90
6	8	杯蓋	(13.0)	3.9			（内）灰 （外）暗灰	30		窯体内	95
7	8	杯身	(13.0) (15.7)	4.6		立上り 1.3	（内）灰 （外）灰	55		窯体内	102
8	8	杯身	(13.1) 15.0	4.2		立上り 0.8	（内）青灰 （外）青灰	40	焼成時に杯蓋付着。 内外　窯体付着。	窯体内	91
9	8・14 15	杯身		残3.2			（内）灰 （外）灰	55	内外　自然釉付着、焼けひずみあり。 外　底部にヘラ記号あり。	窯体内	92
10	8 9	杯蓋	14.9	3.7			（内）灰 （外）暗青灰	40		窯体	105
11	8	杯蓋	14.9	3.6			（内）青灰 （外）青灰	40		窯体	103
12	8・14	杯蓋	13.1	3.3			（内）灰 （外）灰	30	外　中央にヘラ切り痕（1cm）あり。	窯体	107
13	8 9	杯蓋	14.3	4.6			（内）灰 （外）暗青灰	50	外　中央凸部にヘラ傷と雑なヘラケズリ痕あり。	窯体	109
14	8・14	杯蓋	(14.2)	残4.4			（内）青灰 （外）青灰	30	内外　窯体付着。 外　天井部にヘラ記号あり。	窯体	101
15	8 9・15	杯身	13.0 15.0	3.7		立上り 0.8	（内）灰 （外）灰	60	内　中央に径8cmのリング状の器壁の荒れ一部にあり。	窯体	108
16	8	杯身	(13.5) (15.6)	残4.0		立上り 1.0	（内）暗青灰 （外）灰	30		窯体	96
17	8 9	杯身	(13.3) (15.4)	残4.4		立上り 0.8	（内）青灰 （外）ｵﾘｰﾌﾞ灰	35	内　中央にリング状に器壁の荒れあり（径5cm）。 外　中央にヘラ切り痕あり。（径2～3cm）。	窯体	97
18	8・14 9	杯身	13.0 15.2	4.3		立上り 0.5	（内）灰 （外）灰白	40	内外　窯体付着。 外　中央にヘラ切り痕あり（径3cm）ヘラケズリカス付着。	窯体	106
19	8 9	短頸壺蓋		3.3	10.2		（内）灰 （外）灰	45	外　天井部にヘラ切り未調整。	窯体	111
20	8	短頸壺蓋	(10.8)	3.4			（内）青灰 （外）青灰	10	外　天井部にヘラケズリ。 ヘラ切り痕多く残る。	窯体	100
21	8	蛸壺		残2.1		穴径 0.7	（内） （外）灰	80	手ずくね。 接合部で剥離している。	窯体	110
22	8 9	蛸壺	4.4	7.0	4.8		（内）灰 （外）灰	80	2孔一対の穿孔あり。 外　ヨコナデ、底部にヘラ切り痕あり。。口縁部～底部に自然釉付着。	窯体	98

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量（ ）は復元値（単位cm） 口径（上段） 受部径（下段）	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 （%）	備考	出土地区	実測番号
23	8	高杯		3.3	15.8		（内）灰 （外）灰	5		窯体	104
24	8 9	器台		残19.7	(11.9)		（内）灰白 （外）灰白	30		窯体	10
25	9 10・15	杯身	13.1 15.4	4.5		立上り 0.8	（内）紫灰 （外）青灰	100		土器群1	114
26	9 10	杯身	13.2 15.4	4.3		立上り 1.0	（内）灰白 （外）灰白	60	焼成不良。 胎土に径7mmの小石を少し含む。 外　自然釉付着。	土器群1	113
27	9・14 10	杯身	12.5 15.5	4.2		立上り 0.8	（内）青灰 （外）青灰	4 5	内　底部中央に同心円文あり。	土器群1	116
28	9	杯身	12.8 15.0	残4.1		立上り 0.7	（内）灰白 （外）灰	30		土器群1	115
29	9 10	杯身	11.9 14.4	4.5		立上り 0.8	（内）青灰 （外）灰	100		土器群1	112
30	9 10	甕					（内）青灰 （外）灰黄		肩部把手。	土器群1	118
31	9 10	高杯	15.9	11.0	裾部 9.8		（内）灰 （外）灰	90	方形スカシ3方向　内外　ヨコナデ 内　中央に静止ヨコナデ。 外　底部にヘラケズリ。 杯・脚接合痕明瞭。	土器群1	117
32	9 11	杯蓋	15.0	4.6			（内）灰黄 （外）青灰	70		土器群2	121
33	9 11	杯身	12.7 15.2	4.9		立上り 0.7	（内）灰 （外）灰	70	内　中央にリング状の器壁の荒れ一部にあり（径7cm）。	土器群2	140
34	9 11	杯身	12.8 15.1	4.6		立上り 0.9	（内）灰白 （外）灰	100	内　円形リング状の器壁の荒れ一部にあり（径7cm）。 外　中央にヘラ傷あり。 径8mmの小石数点含む。	土器群2	119
35	9・14	杯身	13.2 15.1	残4.3		立上り 0.9	（内）青灰 （外）青灰	40	ヘラケズリカス付着。 外　天井部にヘラ記号あり。	土器群2	120
36	9	蛸壺	(4.4)	残5.4			（内）紫灰 （外）明紫灰	25		土器群2	79
37	9	蛸壺	(4.4)	残3.8			（内）灰 （外）暗灰	20		土器群2	80
38	9 11	高杯		残7.0	裾部 (14.5)		（内）青灰 （外）灰白	10	脚部下半　方形スカシ3方向。	土器群2	122
39	9 10	甕	(13.4)	(20.6)			（内）灰黄 （外）灰黄	20	外　器面荒れのため不明。 内　同心円タタキ。	土器群2	179
40	9 10	甕	16.6	残8.7			（内）灰白 （外）灰黄	40	格子タタキ。 内　同心円タタキあり。	土器群2	123
41	9 10	甕	(40.2)	残11.6			（内）灰 （外）灰	15		土器群2	87
42	10	杯蓋	(17.2)	3.4			（内）灰 （外）灰	15		窯体南側	148
43	10	杯蓋	15.8	残4.1			（内）灰 （外）青灰	15		窯体南側	147
44	10	杯蓋	14.2	3.3			（内）青灰 （外）青灰	40	内　天井部に同心円文あり。	窯体南側	142

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量（ ）は復元値（単位cm） 口径（上段） 受部径（下段）	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 （%）	備考	出土地区	実測番号
45	10・14 11	杯蓋	14.6	残3.8			（内）灰白 （外）灰	50	内　天井部に同心円文あり。	窯体南側	124
46	10・14 11	杯蓋	14.8	4.5			（内）青灰 （外）青灰	70	内　中央の径7cmの範囲に器壁の荒れ一部にあり。	窯体南側	141
47	10・14 11・15	杯蓋	13.4	4.7			（内）灰 （外）灰	90	内　中央に静止ナデと径7cmのリング状の器壁の荒れ一部にあり。 外　中央に小さなヘラ切り痕（1cm）あり。	窯体南側	128
48	10	杯蓋	(14.0)	残3.6			（内）灰 （外）灰	10	分厚い円板状の天井部。 内外　口縁部にヨコナデ。 外　天井部にヘラケズリ。	窯体南側	185
49	10 11	杯身	12.8 15.2	4.3		立上り 1.0	（内）灰白 （外）灰	90	受部に蓋の口縁が付着。 内外　窯体付着。	窯体南側	130
50	10 11・15	杯身	13.6 15.7	4.2		立上り 0.9	（内）灰白 （外）灰	95		窯体南側	131
51	10・14 11	杯身	13.2 15.5	3.8		立上り 0.8	（内）灰白 （外）灰	35	外　天井部にヘラ記号あり。	窯体南側	127
52	10	杯身	12.8 15.3	残4.1		立上り 0.5	（内）灰白 （外）明青灰	15		窯体南側	149
53	10	杯身	12.0 14.7	残3.7		立上り 0.3	（内）灰白 （外）灰	25		窯体南側	125
54	10	杯身	12.8	残2.9			（内）灰白 （外）灰	10	受部に蓋の口縁が付着。	窯体南側	126
55	10 11	杯蓋	16.0	4.6		つまみ径 2.8	（内）灰白 （外）灰黄	40	外　全体に自然釉付着。	窯体南側	132
56	10 12	無蓋高杯	13.2	残7.3			（内）灰白 （外）灰白	70	方形スカシ3方向。	窯体南側	129
57	10 12	壺	最大径 13.2	残9.4			（内）灰白 （外）灰	80	外　底部にヘラケズリ、底～体部にカキ目、体部上半にヨコナデ。	窯体南側	136
58	10	提瓶					（内）灰 （外）灰白		把手。 外　自然釉付着。	窯体南側	135
59	10 12	壺	14.4	14.8			（内）橙 （外）橙	40	外　ヘラミガキ、ヘラケズリ。 外底　指オサエ後、ナデ。	窯体南側	139
60	10	壺	18.6	残3.6			（内）浅黄橙 （外）浅黄橙	20	焼成不良。	窯体南側	138
61	10	甕	30.8	残5.3			（内）灰 （外）灰	14		窯体南側	137
62	11 12	杯蓋	14.0	4.7			（内）青灰 （外）青灰	70		灰原1区	3
63	11	杯蓋	(13.0)	残3.2			（内）紫灰 （外）青灰	20	内　窯体の砂付着。	灰原1区	1
64	11	杯蓋	(10.6)	残3.3			（内）紫灰 （外）青灰	20	外　自然釉付着。 短頸壺蓋の可能性も。	灰原1区	2
65	11	杯身	(14.0) (16.2)	4.4		立上り 0.7	（内）褐灰 （外）灰	30	内　同心円文あり。	灰原1区	11
66	11	杯身	(12.7) (14.4)	残4.6		立上り 0.9	（内）灰黄 （外）紫灰	30	内　窯体付着。	灰原1区	4

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量(　)は復元値(単位cm) 口径(上段) 受部径(下段)	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 (%)	備考	出土地区	実測番号
67	11	杯蓋		残1.8		つまみ径 3.5	(内) 灰 (外) 灰	90		灰原1区	15
68	11	杯蓋		残2.0		つまみ径 3.2	(内)明青灰 (外) 灰白	80		灰原1区	7
69	11	高杯	(12.4)	残3.3			(内) 灰 (外) 暗青灰	12	口縁～体部に鈍いくびれ。 外　底部にヘラケズリ。	灰原1区	12
70	11	高杯		残8.2	(11.2)		(内) 灰赤 (外) 灰赤	20	脚部下半　方形スカシ3方向。	灰原1区	8
71	11	高杯		残5.4	(14.0)		(内) 青灰 (外) 赤灰	20	脚部下半　方形スカシ3方向。	灰原1区	16
72	11	ハソウ	(9.8)	残3.2			(内) 明青灰 (外) 灰	20	内　窯体付着。	灰原1区	5
73	11	提瓶					(内) 灰白 (外) 灰白			灰原1区	17
74	11 16	甕	(14.0)	残6.4			(内) 灰白 (外) 灰白	23		灰原1区	23
75	11 16	甕	(46.0)	残11.2			(内) 青灰 (外) 灰白		ヘラによる施文　キザミ文。	灰原1区	9
76	11 16	鉢	(10.6)	残11.7			(内) 灰 (外) 暗灰	20	精良な胎土。 内外　口縁～体部にヨコナデ。 外　底部にヘラケズリ。	灰原1区	190
77	11・14 14	杯蓋	(15.4)	4.6			(内) 暗灰黄 (外) 黒	40	外　天井部にヘラ記号あり。 天井部にヘラ切り痕あり(径2～3cm)。	灰原2区	20
78	11 12・15	杯蓋	(15.0)	3.0			(内) 灰黄 (外) 灰	30		灰原2区	38
79	11 12	杯蓋	14.2	4.6			(内) 灰 (外) 灰	80	内　中央付近に同心円文あり。 外　多量に自然釉付着。	灰原2区	29
80	11	杯身	(14.0) (16.6)	残3.7		立上り 0.8	(内) 灰 (外) 灰	25	焼きひずみあり。	灰原2区	72
81	11	杯身	(14.0) (16.0)	残3.0		立上り 0.8	(内) 灰 (外) 灰	30	内外　窯体付着。	灰原2区	70
82	11	杯身	(14.0) (16.0)	残3.4		立上り 0.8	(内) 灰 (外) 灰	20	内外　底部に釉付着。	灰原2区	73
83	11	杯身	(13.8) (16.0)	残3.1		立上り 0.7	(内) 灰 (外) 灰	30		灰原2区	71
84	11	杯身	(14.6) (16.6)	残3.6		立上り 1.0	(内) 灰白 (外) 灰	15		灰原2区	26
85	11	杯身	(13.0) (15.6)	残3.3		立上り 0.7	(内) 灰黄 (外) 暗灰黄	35	受部に蓋付着。	灰原2区	23
86	11	杯身	(14.2) (16.4)	残3.0		立上り 0.8	(内) 灰 (外) 灰	20		灰原2区	25
87	11 13	杯身	(12.6) (14.8)	3.4		立上り 0.7	(内) 灰 (外) 灰	85	外　中央にヘラ切り痕の小突起あり (径7mm)。	灰原2区	32
88	11	杯身	(13.8) (16.3)	残3.4		立上り 0.9	(内) 灰白 (外) 灰白	25	内　同心円文あり。	灰原2区	35

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量（ ）は復元値（単位cm） 口径（上段） 受部径（下段）	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 （%）	備考	出土地区	実測番号
89	11	杯身	(13.0) (14.9)	残4.0		立上り 0.7	（内）灰 （外）灰	45	内　器壁の荒れ一部あり。 外　ヘラケズリとハケ状工具での強いヨコナデ痕あり。	灰原2区	21
90	11	杯身	(12.8) (15.0)	残4.3		立上り 0.8	（内）灰白 （外）灰ｵﾘｰﾌﾞ	20	内　同心円文あり。	灰原2区	24
91	11 13	杯身	(12.6) (14.8)	4.6		立上り 1.2	（内）灰白 （外）灰黄	60	外　底部にヘラ記号あり。 中央にヘラ切り痕（径1cm）あり。	灰原2区	36
92	12	高杯	(13.0)	残4.0			（内）暗青灰 （外）暗青灰	25	内　天井部に同心円文、粘土カスあり。	灰原2区	69
93	12 13	杯身	(13.1) (15.4)	残3.8		立上り 0.8	（内）灰 （外）灰	40	内　中央に同心円文あり。	灰原2区	22
94	12 13	杯身	12.0 14.8	4.2		立上り 0.6	（内）灰 （外）暗灰	96		灰原2区	34
95	12 13	壺	(8.0)	残6.9			（内）灰 （外）灰	30	外　肩部に蓋（径10.5cm）の付着痕あり。	灰原2区	74
96	12	直口壺		残5.5		頸部径 (8.5)	（内）灰黄 （外）灰黄	20	焼成不良。 外　赤色顔料塗布。	灰原2区	76
97	12 13	杯蓋	(14.5)	5.4			（内）浅黄 （外）灰	60	内　中央に静止ナデあり。 外　ツマミ径2.9cm。	灰原2区	33
98	12	壺蓋	(7.6)	残2.7			（内）黒 （外）灰	20	内　ヨコナデ。 外　天井部にヘラケズリ、口縁部にヨコナデ。	灰原2区	181
99	12 13	無蓋高杯	(12.0)	残3.8			（内）にぶい黄 （外）灰	47	内外　ヨコナデ。 内　別個体付着痕あり。 外　底部剥離。	灰原2区	31
100	12	無蓋高杯	(13.8)	残5.2			（内）灰 （外）灰	15	内外　ヨコナデ。 内　底部にナデ。 外　一条の沈線あり。	灰原2区	186
101	12	高杯		残7.6	基部径 4.2		（内）灰ｵﾘｰﾌﾞ （外）灰	70	スカシなし。	灰原2区	86
102	12 13	高杯		残4.0	裾部 (11.0)		（内）青灰 （外）青灰	25	脚部に径5.5mmの円形スカシあり。 （2～3ヶ所か）	灰原2区	77
103	12	高杯		残4.0	7.6		（内） （外）	45	焼成やや不良。 方形スカシ3方向。	灰原2区	192
104	12	高杯		残3.8	(12.0)		（内）灰 （外）暗灰	20	方形スカシ3方向 外　カキ目。	灰原2区	78
105	12 13	高杯		残5.0	(12.8)		（内）黒 （外）黒	20	脚部下半　方形スカシ3方向。 壺の脚か。	灰原2区	85
106	12 13	高杯		残9.2	(15.0)		（内）灰 （外）灰	15	脚部下半　方形スカシ3方向。	灰原2区	84
107	12	甕	(24.7)	残3.1			（内）灰 （外）灰	20		灰原2区	83
108	12 16	提瓶	(11.6)	残7.5			（内）灰 （外）灰	40	頸部接合痕あり。	灰原2区	81
109	12	すり鉢		残7.9	(9.0)		（内）灰白 （外）灰白	20	分厚い円板状の底部。 板状の粘土を4～5枚重ね合わせてる。 未調整。 内外　体部にヨコナデ。	灰原2区	191
110	12・14	杯蓋	(15.4)	残3.5			（内）赤灰 （外）灰	25	外　天井部にヘラ記号あり。	灰原3区	45

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量(　)は復元値(単位cm) 口径(上段) 受部径(下段)	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 (%)	備考	出土地区	実測番号
111	12 12	杯蓋	(15.4)	4.0			(内) 灰黄 (外) 黄灰	37	外　天井部に径4cmの凹みあり。	灰原3区	39
112	12	杯蓋	(14.0)	残2.9			(内) 灰 (外) 灰	10	内外　口縁部にヨコナデ。 外　天井部にヘラケズリ、一条の沈線あり。高杯の可能性も。	灰原3区	182
113	12	杯蓋	(14.2)	残4.1			(内) 灰 (外) 灰白	10	内外　ヨコナデ。	灰原3区	44
114	12・14	杯身	(15.1) (16.7)	2.5		立上り 1.1	(内) 灰 (外) 暗灰	35		灰原3区	37
115	12	杯身	(13.4) (16.0)	2.7		立上り 0.6	(内) 灰 (外) 灰	22		灰原3区	40
116	12 16	横瓶	(12.0)	残6.0			(内) 灰白 (外) 灰	35	内　体部内面黒色。	灰原3区	47
117	12	甕	(14.0)	残5.5			(内) 浅黄 (外) 浅黄	10	焼成不良。 少し板状に肥厚する口縁。	灰原3区	188
118	12	ハソウ	(13.4)	残2.3			(内) 灰白 (外) ｵﾘｰﾌﾞ黒	25	内　自然釉付着。	灰原3区	41
119	12	高杯		残2.2	(11.2)		(内) 明青灰 (外) 明青灰	20	裾部にスカシの小円孔あり。	灰原3区	43
120	12	壺		残3.1	(5.0)		(内) 灰 (外) 灰	20	内　窯体付着。 外　ヨコナデ、段あり。	灰原3区	189
121	12	杯蓋	15.2	4.4			(内) にぶい黄 (外) 灰黄	20		灰原4区	54
122	12	杯蓋	15.0	4.7			(内) 灰 (外) 灰	25	内　ややシャープな稜線あり。	灰原4区	52
123	12・14 12・15	杯蓋	16.2	4.0			(内) にぶい橙 (外) にぶい褐	30	外　天井部にヘラ記号あり. 赤色顔料塗布。	灰原4区	55
124	12 12	杯蓋	14.0	3.6			(内) 青灰 (外) 灰白	80	内　中央付近にかすかに同心円文あり。 外　中央にヘラ切り痕あり。	灰原4区	66
125	12 13	杯身	(12.0) (14.5)	3.8		立上り 0.8	(内) 黄灰 (外) 灰	45	外　中央に径5.5cmのリング状の器壁の荒れ一部にあり。	灰原4区	56
126	12	杯身	15.9 17.7	3.5		立上り 0.8	(内) 灰白 (外) 灰	15		灰原4区	53
127	12 13	高杯		残5.2	(11.0)		(内) 灰白 (外) 黄灰	30	脚部内面　自然釉付着。 スカシなし。	灰原4区	67
128	12	高杯		残13.2	沈線径 5.7		(内) 浅黄 (外) 灰	30	方形スカシ3方向。	灰原4区	61
129	13	提瓶					(内) 褐灰 (外) 灰	100	把手。	灰原4区	58
130	13 16	提瓶					(内) 灰 (外) 灰	100	半環状に手ずくねの把手をつける。	灰原4区	59
131	13	提瓶					(内) 黄灰 (外) 灰	100	把手。	灰原4区	57
132	13	提瓶					(内) 青灰 (外) 青灰	100	把手。	灰原4区	60

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量（　）は復元値（単位cm） 口径（上段） 受部径（下段）	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 （%）	備考	出土地区	実測番号
133	13	壺	(9.1)	残4.7			（内）灰白 （外）灰	10	焼成やや不良。 内外　口縁部にヨコナデ。 外　頸部に2条の沈線、波状文あり。	灰原4区	184
134	13	壺	(12.2)	残4.2			（内）暗灰 （外）灰	40	角張った口縁と短い頸部。 内　黒色。	灰原4区	183
135	13	鉢	(13.6)	残7.0			（内）灰 （外）灰	10	分厚い器壁。	灰原4区	187
136	13	壺	(9.6)	残4.1			（内）灰白 （外）灰白	20	焼成やや不良。 内外　口縁～頸部にヨコナデ。	灰原4区	180
137	13	甕	23.4	残7.8			（内）灰白 （外）灰	10		灰原4区	63
138	13	甕	(23.0)	残8.7			（内）灰 （外）暗灰	20	外　自然釉付着。	灰原4区	68
139	13 16	甕		残9.2		頸部径 20.0	（内）灰 （外）灰白	15		灰原4区	62
140	13 16	甕	(22.0)	残13.1			（内）暗灰 （外）灰白	25	自然釉多量に付着。	灰原4区	64
141	13	杯身	14.5 16.8	3.4		立上り 0.7	（内）青灰 （外）暗青灰	40	内外　窯体付着。	包含層	145
142	13 14	杯身	12.5 15.1	3.7		立上り 0.7	（内）灰 （外）灰	80	焼きひずみあり。 外　中央にヘラ切り痕あり（径2cm）。	包含層	144
143	13	杯身	11.5 14.0	残3.8		立上り 0.5	（内）灰 （外）灰白	30	内　口縁～底部にヨコナデ。 外　体部に弱いヨコナデ、底部にヘラ切り未調整とナデ。	包含層	143
144	13 14	提瓶	9.1	残3.2			（内）灰 （外）灰	70		包含層	146
145	14	杯身					（内） （外）		外　天井部ヘラ記号あり。	灰原3区	—
146	14	杯身					（内） （外）		外　天井部ヘラ記号あり。 ヘラ切り痕あり。	灰原1区	—
147	14	杯身					（内） （外）		外　天井部ヘラ記号あり。	灰原4区	—
148	14	杯身					（内） （外）		外　天井部ヘラ記号あり。	灰原2区	—
149	14	杯身					（内） （外）		外　天井部ヘラ記号あり。	灰原3区	—
150	14	杯身					（内） （外）		外　天井部ヘラ記号あり。	灰原4区	—
151	15	道具	11.3				（内）灰 （外）灰	60	杯の天井部。 外縁を打ち欠く。	灰原2区	27
152	15 16	有孔円盤				直径 4.6 厚さ 0.9	（内）青灰 （外）青灰	50		灰原1区	6
156	17 14	杯蓋	15.1	2.7			（内）青灰 （外）暗青灰	60		ＴＮ56表採	167
157	17	杯蓋	(17.3)	2.4			（内）青灰 （外）青灰	35	内外　ヨコナデ。	ＴＮ56表採	166

番号	挿図番号 図版番号	器種	法量(　)は復元値(単位cm) 口径(上段) 受部径(下段)	器高	底・高台径	その他	色調	残存率 (%)	備考	出土地区	実測番号
158	17	杯蓋	(19.7)	2.9			(内) 青灰 (外) 青灰	20	内　ヨコナデ後ナデ。 外　ヨコナデ。	ＴＮ56表採	165
159	17	杯身	(15.2)	3.9	(10.5)		(内) 青灰 (外) 青灰	45	内外　ヨコナデ。 外　底部に雑なナデ。	ＴＮ56表採	158
160	17	杯身	(16.5)	4.3	(12.5)		(内) 青灰 (外) 青灰	50	内外　ヨコナデ。	ＴＮ56表採	162
161	17	杯身	(17.8)	4.6	(12.6)		(内) 青灰 (外) 青灰	25	内　ヨコナデ、ナデ。 外　ヨコナデ。	ＴＮ56表採	164
162	17	杯身	(15.8)	3.9	(11.0)		(内) 灰白 (外) 灰	30	内外　ヨコナデ。 内　底部に静止ナデ。 外　底部に雑なナデ。	ＴＮ56表採	156
163	17	杯身	(12.6)	3.4			(内) 灰 (外) 灰	45	外　底部全面にヘラ切り痕あり。	ＴＮ56表採	155
164	17	杯身	(14.2)	残4.0			(内) 灰 (外) 青灰	20		ＴＮ56表採	153
165	17	杯身	(14.0)	残3.8			(内) 灰白 (外) 灰白	20		ＴＮ56表採	152
166	17	杯身	(16.5)	残5.7			(内) 灰 (外) 青灰	15		ＴＮ56表採	151
167	17	杯身	(17.0)	残5.4			(内) 青灰 (外) 青灰	23	内外　ヨコナデ。 内　底部に静止ナデ。	ＴＮ56表採	154
168	17	杯蓋		残2.2		つまみ径 3.4	(内) 灰 (外) 灰		内　ナデ。 外　ヨコナデ。	ＴＮ58西表採	170
169	17	杯身	15.5	4.2	10.8		(内) 青灰 (外) 青灰	15		ＴＮ58西表採	169
170	17	長頸壺		残7.0		肩部径 16.5	(内) 灰 (外) 灰	10	外　ヨコナデ、ナデ。	ＴＮ58西表採	168

凡例　1．器高欄の「残」は「残存高」を示す。
2．その他の欄の杯身の「立上り」は「立上り高」を示す。
3．備考欄の「外」・「内」は「外面」・「内面」を示す。
4．杯蓋、身の調整は外面の天井部・底部をヘラケズリ、口縁部をヨコナデ調整、内面はヨコナデ調整である。
又他の器種でもヨコナデ調整が行われている。

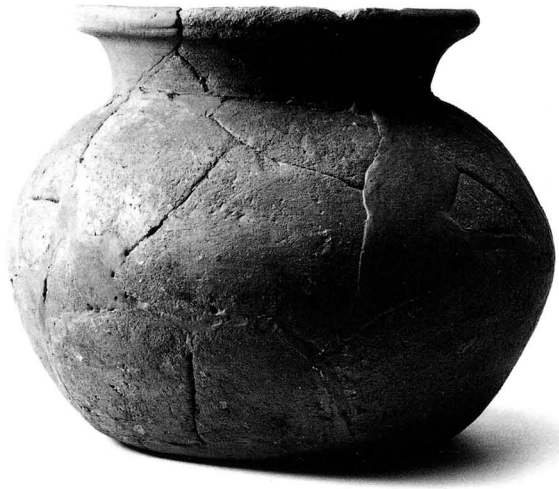
報 告 書 抄 録

ふりがな	すえむら・たにやまいけ12ごうよう
書名	陶邑・谷山池12号窯
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０００－５
編著者名	今村道雄
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL 06-6941-0351
発行年月日	2001年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
すえむらかまあとぐん 陶邑窯跡群	いずみし 和泉市 かじやちょう 鍛冶屋町・ うらたちょう 浦田町	27219		34° 26′ 47″	135° 28′ 7″	1998年８月 ～ 1998年12月	2,800㎡	柑橘母樹園跡地整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
陶邑窯跡群	生産遺跡	古墳時代後期	窯跡、灰原	須恵器・杯蓋・杯・高杯・提瓶・横瓶・甕等	谷山池地区の登窯と灰原の調査

写　真　図　版

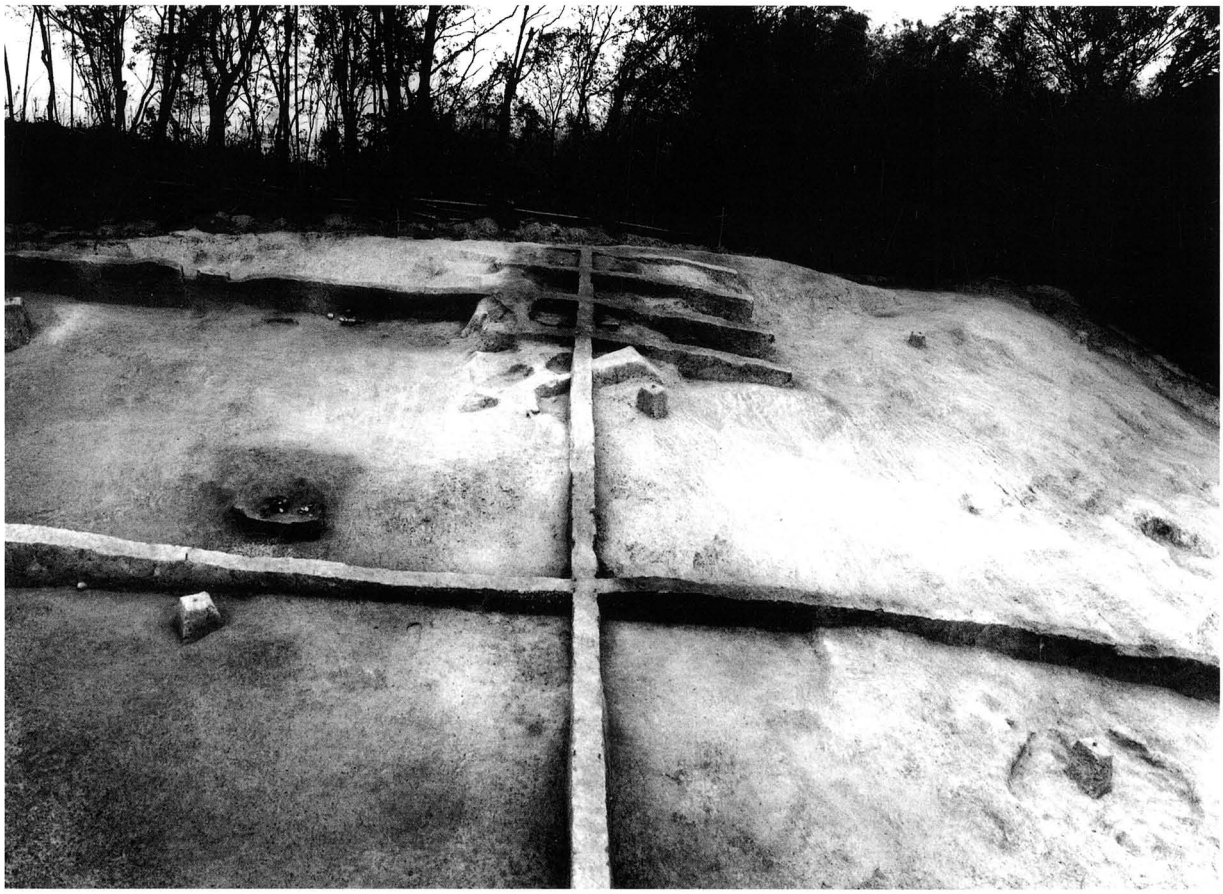


59
南側谷出土

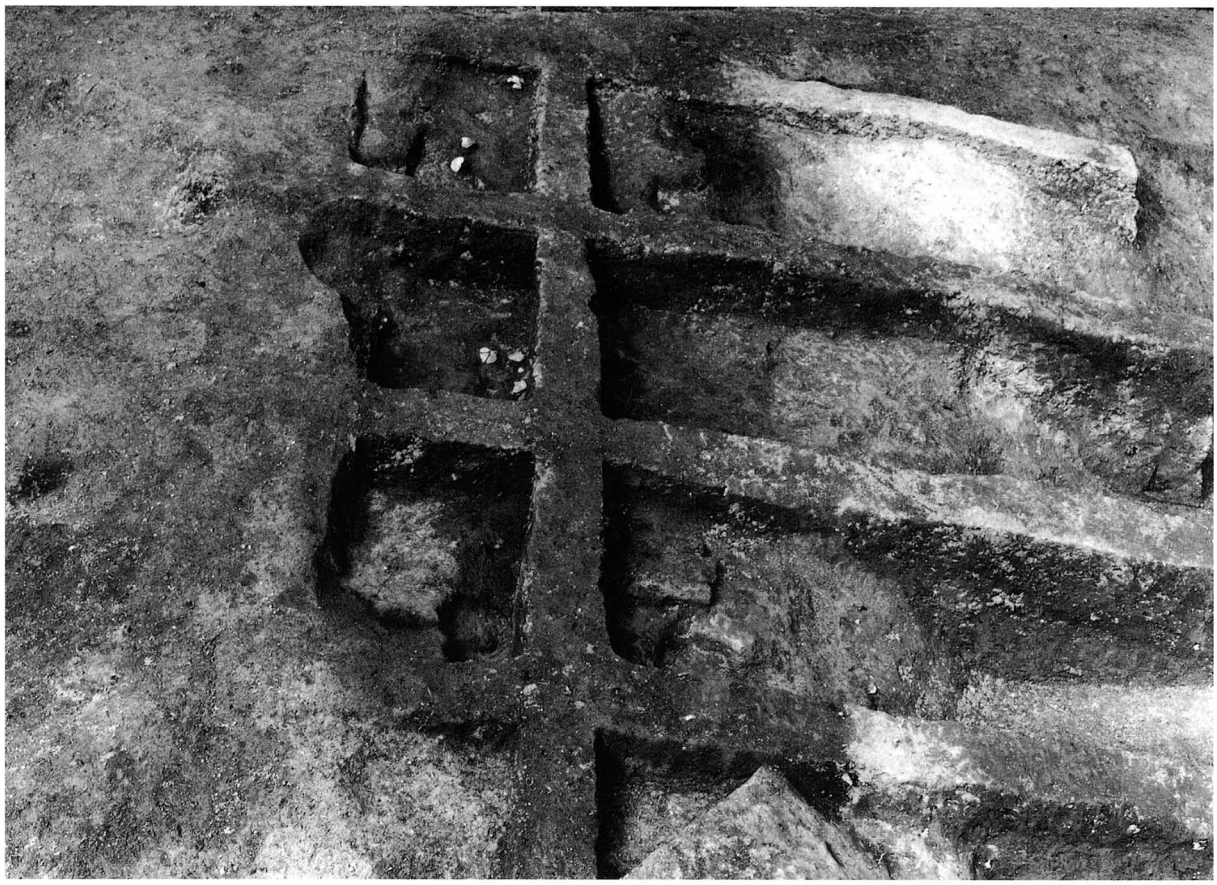
（上）調査区遠景

（下）調査区近景

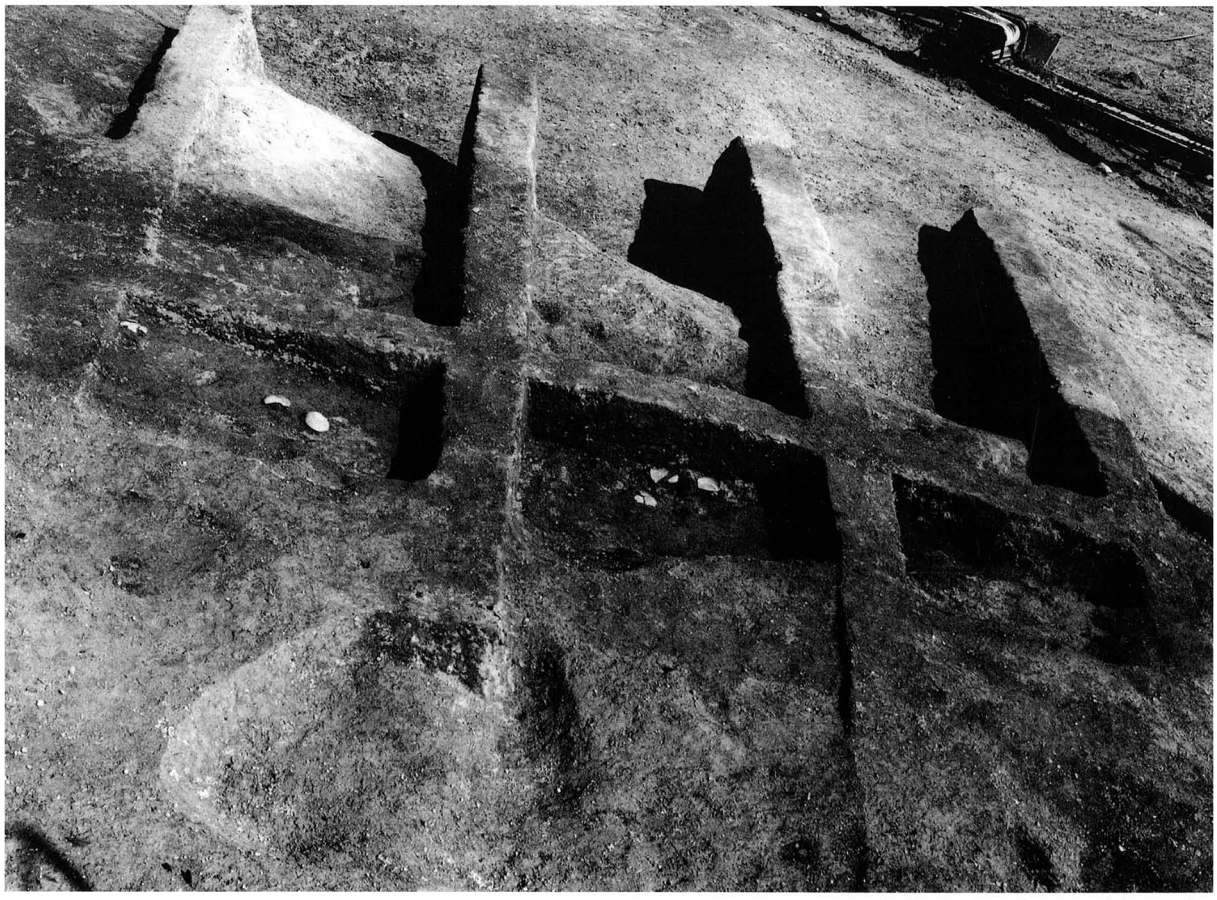
（上）機械掘削状況



（下）灰原除去後の旧地形



（上）窯体調査状況（東から）



（下）窯体調査状況（南から）

（上）床面遺物出土状況

（下）床面遺物出土状況

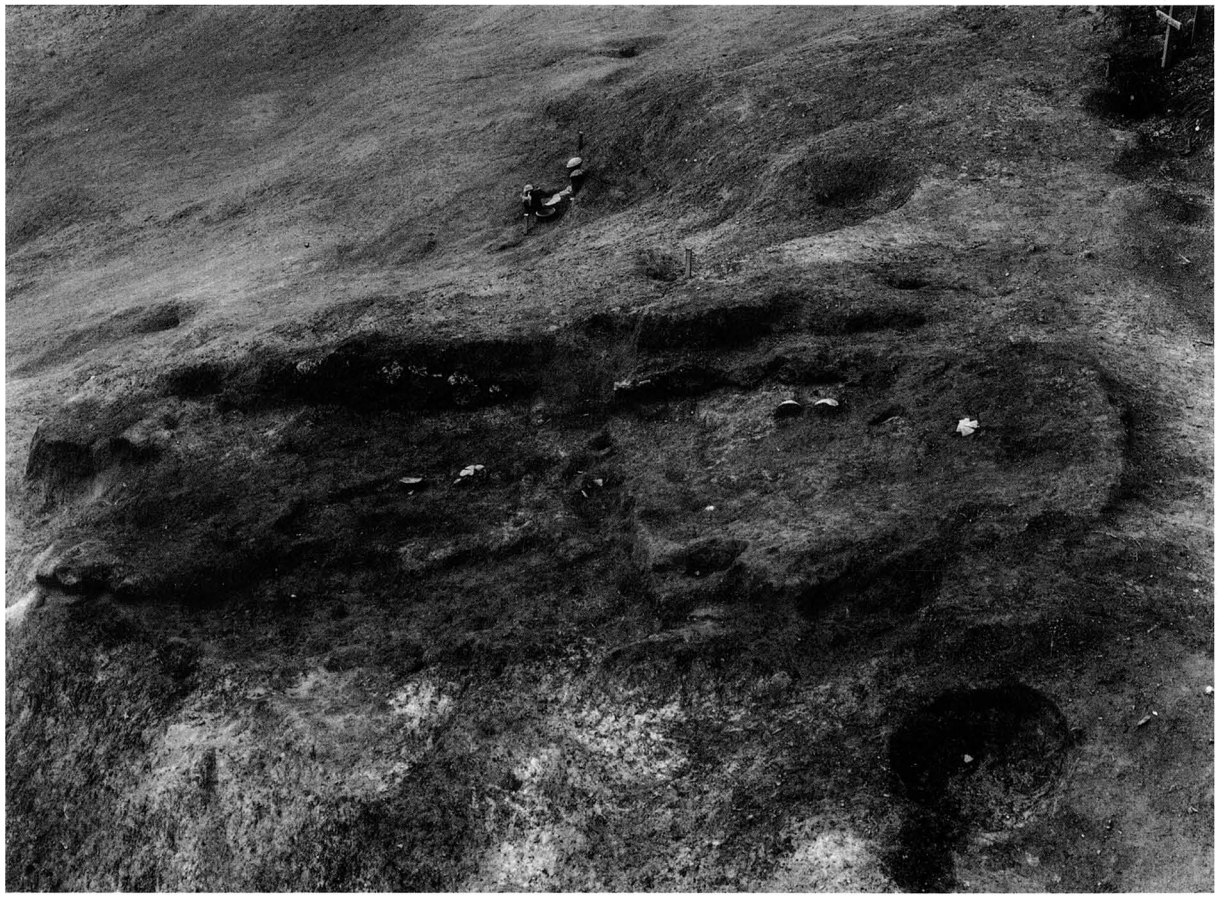
（上）窯南側土器群1　出土状況

（下）窯南側土器群1　出土状況

（上）窯南側土器群1　出土状況（細部）

（下）窯南側土器群2　出土状況（細部）

（上）窯体検出土状況（北から）



（下）窯体検出土状況（北から）

（上）窯体断ち割り状況

（下）近世溝検出状況

5

4

10

19

13

22

17

24

18

15

27

25

69

26

39

31

40

30

41

32

38

45

47

46

34

33

55

51

49

50

57

56

59

62

79

123

78

111

124

91

93

87

94

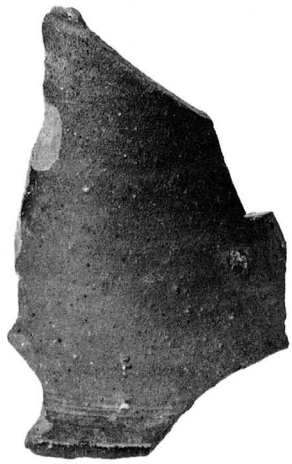
97

125

102

99

105



106

127

156

163

176

142

177

144

178

179

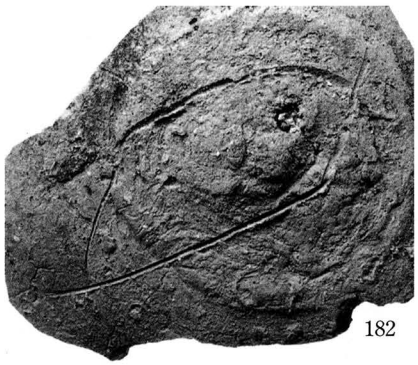
154

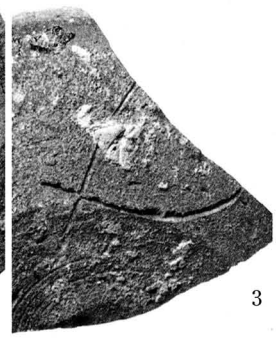
36

180

181

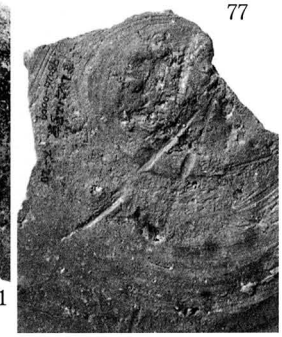
37


182


3

1

77



9

123

50

25

5

78

15

47

140

75

139

95

116

74

76

108

130

152

大阪府埋蔵文化財調査報告 2000－5

陶邑・谷山池12号窯

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL. 06-6941-0351
発行日　2001年3月
印　刷　サツキ印刷株式会社
TEL. 072-828-0171